

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Prefectural
Cultural Assets Research Center

第 13 号 1998

- 米代川流域の旧石器時代資料
—能代・山本地方を中心として—…………… 工藤直子
高橋 学 …… 1
- 東北以北の双耳環と環状凸帯付長頸瓶…………… 利部 修 ……25
- 秋田県出土の珠洲系陶器資料集成（下）…………… 栗澤光男 ……36
- 〔資料紹介〕
結髪形土偶
—男鹿市上釜川 I 遺跡で発見された遺物から—…………… 磯村 亨 ……75

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Prefectural Cultural Assets Research Center

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡出土の「岩鏡」です。縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Prefectural
Cultural Assets Research Center

第 13 号

1 9 9 8

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Prefectural Cultural Assets Research Center

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要 第13号

目次

米代川流域の旧石器時代資料	
一能代・山本地方を中心として	工藤直子 1 高橋 学
東北以北の双耳杯と環状凸帯付長頸瓶.....	利部 修25
秋田県出土の珠洲系陶器資料集成（下）	栗澤光男36
《資料紹介》	
結髪形土偶	
一男鹿市上鮎川I遺跡で発見された遺物から一	磯村 亨75

米代川流域の旧石器時代資料

能代・山本地方を中心として一

丁 藤直子・高橋 学

秋田県埋蔵文化財センターでは、平成6年度に山本郡琴丘町に所在する家の下遺跡の発掘調査を実施した。この遺跡は縄文時代（主に中期～後期の集落跡）と旧石器時代の複合遺跡であり、前者に関する資料は、平成7年3月に報告書「家の下遺跡（1）」としてまとめている^(註1)。一方の後者については同年4月より整理作業を開始し、平成10年3月に「家の下遺跡（2）」（旧石器時代編）を上梓した^(註2)。

この報告書編成にあたり、筆者等は秋田県下の旧石器出土遺跡一覧と家の下遺跡の周辺地域 能代・山本地方を中心とする米代川流域における旧石器時代の資料を集録している。これは筆者の一人である高橋にとっては、当該資料にかかわりをもつことが初めてであり、基本的文献・情報の収集を兼ねて報告書作成の手始めとして行ったものである。このうち前者は、報告書の歴史的環境の項目の中で取り上げているが、後者の資料については紙数の関係からほとんど生かすことができなかつた。そこで本稿を借りて集録した資料の提示をすることにしたものである。

米代川流域における旧石器時代の遺跡は、第1図に示したように20を越す遺跡（地点）が存在するが、それは採集資料であったり、出土資料であっても点的な検出に留まる例が多い。一定のまとまりをもって確認・調査された遺跡は、此掛沢Ⅱ遺跡・鴨子台遺跡と家の下遺跡があるにすぎない。以下では各遺跡で採集・出土した資料について、地区毎にまとめた上でその概要を記すことにする。また此掛沢Ⅱ・鴨子台の2遺跡は、別項で独立させ石器群に対する評価についても言及したい。

1. 米代川河口域左岸の遺跡

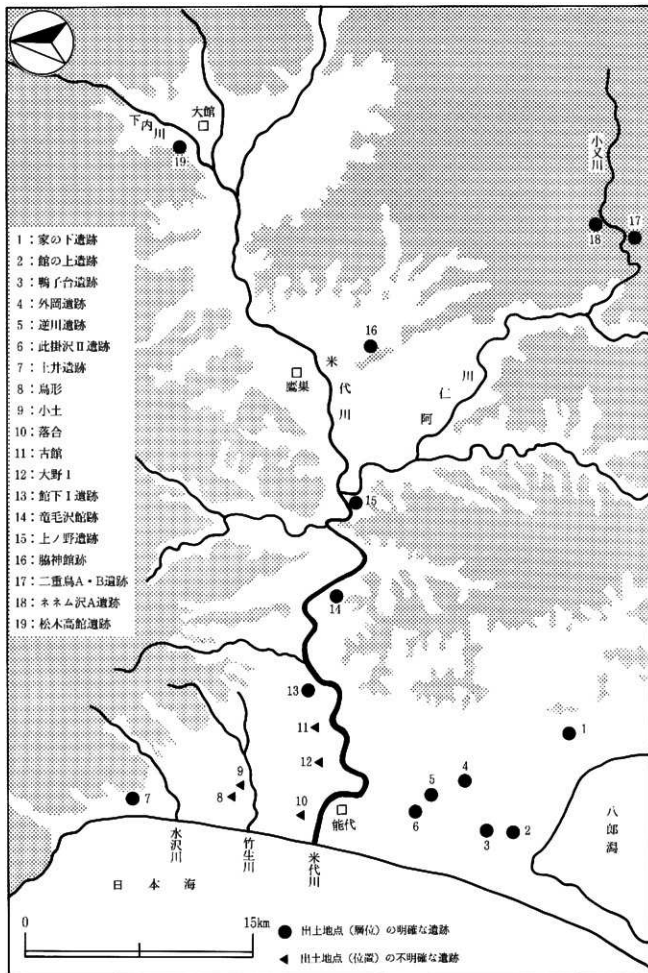
(1) 逆川遺跡（第1図5、第2・3図、写真1～5）

逆川遺跡は山本郡山本町外岡字波道及び能代市浅内字大館南沢に所在し、山本町逆川集落の南南西約500mに位置する。遺跡は日本海江線に沿うように南北にのびる海成段丘である成合台地（武蔵野面相当）の北東部、標高42m程の台地上に立地する。沖積面との比高は15～20mである。

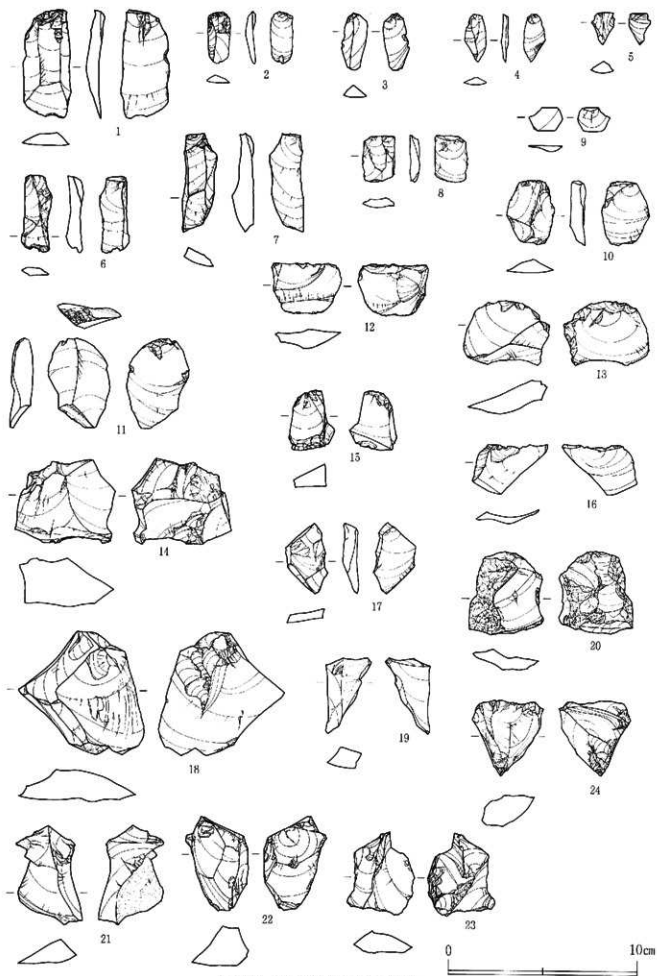
同管能代開拓事業に伴う範囲確認調査が昭和56年に実施され、旧石器、縄文土器、土師器・須恵器等が出土している^(註3)。このうち旧石器は、遺跡西部（能代市浅内地内）の地山層から25点出土した^(註4)。なお遺物実測図（第2・3図）は、一部が報告書に掲載されていたが、今回全点再実測している。

出土した旧石器は、石刃・縦長剃片、石核、剃片・碎片であり、定型的な石器は見られない。また接合もできなかった。石材はいずれも珪質泥岩・頁岩である。

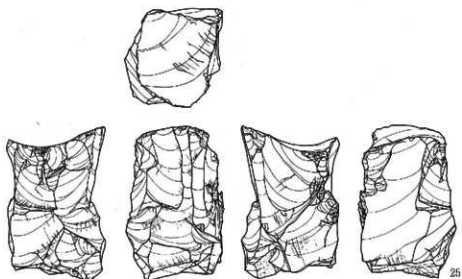
縦長剃片は10点程確認できるが、明確に石刃技法によって産出された剃片は4点（1～4）にすぎない。1は頭部に調整が見られる石刃であり、打点と相対する遠位辺にごく小さい抉入状の加工がなされる。2～4は最大幅が1.2cmとなる小形の石刃である。2は頭部に調整が認められ、遠位辺には腹面側に小さい加工が見られる。3の遠位辺はヒンジフラクチャアで終わるものであり、打面腹面側に薄い調整が加わる。4は背面左側縁を斜めに折断することにより先端部が尖る形状となる。



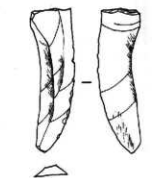
第1図 米代川流域の旧石器時代遺跡位置図



第2図 逆川遺跡出土の旧石器(1)



第3図 逆川遺跡出土の旧石器(2)



第4図 外岡出土の旧石器

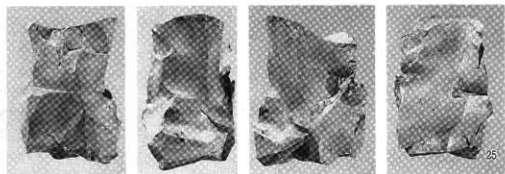


写真1 逆川遺跡出土の旧石器(3)



写真2 逆川遺跡出土の旧石器(4) 背面



写真3 逆川遺跡出土の旧石器(5) 腹面

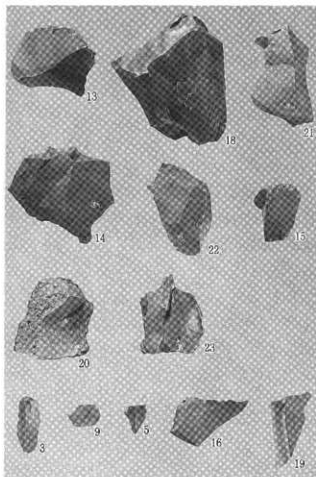


写真4 逆川遺跡出土の旧石器(6) 背面

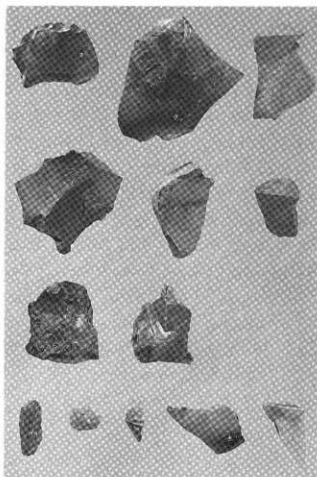


写真5 逆川遺跡出土の旧石器(7) 腹面

その他の割片では、8・10～12の側縁に刃こぼれ状の剥離が認められ、これらの割片と16・21などは遠い辺がヒンジフラクチャアとなって終わっており、全割片数に対しヒンジフラクチャアで終わるものの割合は高いといえる。また礫皮面を残す割片(13・17～20・22～24)は、不規則な形状で肉厚であったりしており、これらは石核の打面作出や打面再生、石核素材の製作によってできたものであると考えられる。

25は半剥離面打面を残す石核(残核)であるが、打面が平坦ではなく凹状となる。高さが7～8cm程の石核から石刃・縦長割片作出(一部小形貝殻状割片も含む)を意図した剥離が行われているが、剥離痕跡から観察する限りにおいては意図した目的の割片は得られていないようである。

(2) 外岡遺跡(第1図4、第4図)

『山本町史』によると、山本郡山本町外岡字北外岡で石刃1点が発見(昭和50年4月)されている。^(註5)しかし『秋田県遺跡地図(中央版)』には未登録の遺跡である。^(註6)石器の出土地は、逆川遺跡の南東約1.5kmに位置し、成合台地の東に隣接する志戸橋野台地(下末吉面及び武蔵野面相当面の複合)上に立地する。標高は30m程で舌状台地北縁にあたり、台地下の沖積面には八郎潟に注ぐ鶴川川が西流している。石器は地山層から出土したといわれているが「断言はできない」ようである。

第4図は頁岩を素材とする長さ7.5cmの石刃である。背面右側縁には「使用痕と思われる刃こぼれがみられ、石器として使用されたことがわかる」。基部は実測図を見る限りでは背面側からの加撃による折断が行われているようである。

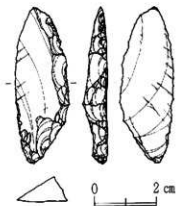
(3) 館の上遺跡(第1図2、第5図)

館の上遺跡は山本郡八竜町鶴川字館の上に所在し、逆川遺跡と同じ成合台地の南端部に立地する。遺跡の標高は約30m、沖積面との比高は約25mである。本遺跡の北約1.5kmには鴨子台遺跡が位置する。

旧石器資料は平成3年に実施した範囲確認調査において遺跡東端部第三層(黄褐色土)上面で検出されたナイフ形石器1点である(註7)。

第5図は横長剥片を素材としたナイフ形石器である。背面右側縁はほぼ全体には急角度調整がなされ、細部加工後の形状は緩やかな弧状を呈する。一方左側縁基部は平坦加工の後、微細な剝離が付加される。この微細剝離痕については、「装着痕の可能性もあることから、本資料は基本的には一側縁加工のもの」と理解している。長さ5.0cm、幅1.7cm、厚さ0.8cm、頁岩製である。

横長剥片を素材とし一側縁加工のナイフ形石器は、一般に近畿・瀬戸内地方を中心に分布を示す国府系ナイフ形石器と呼ばれるものの範疇に含まれる。国府系石器群は瀬戸内技法に立脚した技術基盤を有するとされるが、館の上の資料はその典型からは外れる。しかし同系石器群の技術的多様性の中での位置づけは可能であり、「国府系石器群の影響が秋田にまで及んでいたことが予測される」ものである。



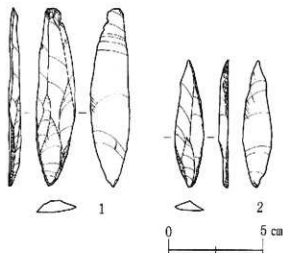
第5図 館の上遺跡出土の旧石器

2. 米代川河口域右岸の遺跡

(1) 館下I遺跡(第1図13、第6図)

館下I遺跡は能代市久喜沢字館下に所在し、米代川右岸域に広がる東雲台地の南東端部に立地する。標高は約30mであり、沖積面との比高は約20mとなる。国営能代開拓事業に伴う発掘調査が昭和53年に実施されており、縄文時代中期の集落遺構と共に旧石器が2点確認された(註8)。

旧石器は舌状にのびる台地北縁の赤褐色土層(ローム)上面で出土した。両者間の距離は2mであったそうである。なお石器実測図は報告書に掲載されているが、今回実測している。



第6図 館下I遺跡出土の旧石器

第6図1は石刃を素材としたナイフ形石器である。背面には打面側からの加撃による3回の頭部調整剝離が2条の稜・先行剝離面を切るように残る。この調整剝離と右刃剝離後の打面除去及び器長の半分程にまで及ぶ2側縁の急角度調整は、基部が尖状を呈する石器に仕上げられる。一方の先端部は背面側にごく小さい緩斜度調整が施され、幅の狭いへう状の形態となり尖頭にはならない。長さ9.40cm、最大幅2.05cm、最大厚0.65cm、重さ10.74g、柱質泥岩製である。

2も石刃を素材とするナイフ形石器である。1と同様に二側縁加工となるが、1が基部調整であるのに対し、2では右側縁の調整が尖状を示す先端部にまで及ぶ。基部の調整・形状は1に酷似し、先行剝離面を切る頭部調整が1面認められ、打面を除去し急角度調整により尖状の基部に加工している。長さ6.70cm、最大幅1.50cm、最大厚0.5cm、重さ3.72g、球質泥岩製である。

(2) 大槻久馬氏採集資料

能代市に在住しておられた大槻久馬氏が同市とその周辺において採集した資料のなかに旧石器が含まれていることが、^(註9)富樫泰時氏の調査(昭和47年)で判明した。能代市における旧石器はそれまで発見例がなかったものである。これらの資料は大槻氏が昭和30~40年代半ばにかけて採集したものであり、現在は県立博物館に寄贈されている。旧石器が採集された地点は必ずしも明確ではないが、博物館の寄贈台帳^(註10)によると次の5カ所のようなものである。これらの遺跡はいずれも米代川右岸域に位置・立地している。

なお第7図と写真6・7は、博物館より借用した遺物を今回新たに実測・撮影したものである。

①②能代市坂形字鳥形・鳥形ねやば(第1図8、第7図1・2)

鳥形は能代市北西端部、峰浜村と接する位置にあたり、日本海江線まで直線で約2kmとなる。本地区での遺跡は未確認であり、大字坂形では6遺跡が周知されている。旧石器は「鳥形」と「鳥形ねやば」の注記の

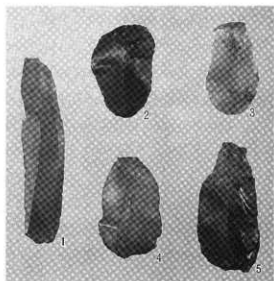
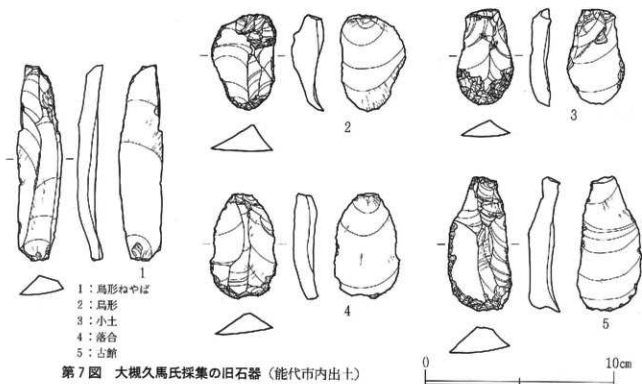


写真6 能代市内出土石器(1) 背面



写真7 能代市内出土石器(2) 腹面

ある2地点から各1点採集されている。なお「烏形ねやば」は、坂形字根洗場のことを指すのかもしれない。ここには根洗場遺跡(縄文時代前期)が立地しており、大槻氏の記録にも「烏形ねやば」では「磨製石斧、縄文前期、石鎌、石錘」採集とある。

1は烏形ねやばで採集されたナイフ形石器である。背面右側縁先端部に急角度調整が認められる。基部には両側縁に僅かに微細な剝離が見られるが、使用時の痕跡を示すものかもしれない。なお左側縁の種状剝離痕は石材の風化状況から後世に加えられた、あるいは偶発的に生じたものようである。石材は珪質泥岩であり、長さ10.4cm、幅2.3cm、厚さ1.0cm、重量29.0gとなる。博物館の受入・収蔵番号は、キ48-638である。

2は烏形で採集された搔器である。縦長剥片を素材とするが、最大幅が器長の半分よりやや上に位置する。石材は珪質泥岩であり長さ5.1cm、幅3.2cm、厚さ1.4cm、重量23.2gとなる。博物館の受入・収蔵番号は、キ48-645である。

③能代市磐字小土(第1図9、第7図3)

小土は先の烏形の南約1.5kmに位置する。本集落周辺には現在旧石器の出土する遺跡は周知されていない。付近では、縄文時代前期の大型住居跡等が検出された杉沢台遺跡(国指定史跡)が立地している。

3は小形縦長剥片を素材とする搔器であり、その末端に円刃状の刃部が形成される。石材はチャートであり、長さ5.0cm、幅3.0cm、厚さ0.9cm、重量15.2gとなる。博物館の受入・収蔵番号は、キ48-485である。

④能代市落合(第1図10、第7図4)

落合は米代川河口城石岸に位置する。本地区では8カ所の遺跡が周知されているが、このなかで旧石器出土を報じた記録は認められない。ただ『能代市史資料編考古』^(註12)によると、中大野Ⅲ遺跡(落合字中大野)出土の遺物の中に「ナイフ形を呈している」石器が紹介されているが、旧石器との記述はない。なお大槻氏が落合で旧石器と一緒に採集した遺物は、縄文中期～後期の土器片、統縄文土器、土師器・須恵器である。

4は縦長剥片を素材とする搔器である。素材末端に加えられる刃部は平刃に近い弱円刃となる。打面はそのまま残置している。石材は珪質泥岩であり、長さ5.5cm、幅3.5cm、厚さ1.0cm、重量21.4gとなる。博物館の受入・収蔵番号は、キ48-323である。

⑤能代市林瀬字古館(第1図11、第7図5)

古館は上記3地区より幾分上流寄りに位置する。ここでは古館Ⅰ遺跡と古館Ⅱ遺跡が周知登録されているが、旧石器出土の記事は見られない。前者は縄文前期・古代・中世の複合遺跡、後者は古代の遺跡である。大槻氏が「古館(左岸山上下層)」より採集した遺物は、旧石器、縄文前期・後期の土器、石槍、土師器、貝殻等である。

5はやや厚手で末端が腹面側に湾曲する縦長剥片を素材とする搔器である。刃部は円刃となるように加工される。打面は残るが、打点部は背面右側縁上端での調整剝離の段階で除去されている。石材は珪質泥岩であり、長さ7.1cm、幅3.3cm、厚さ1.4cm、重量33.7gとなる。博物館の受入・収蔵番号は、キ48-583である。

(3) 大野Ⅰ遺跡(第1図12)

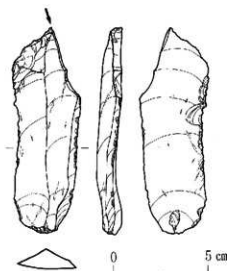
大野Ⅰ遺跡は能代市荷八田字大野に所在する。『秋田県遺跡地図(中央版)』には「旧石器、縄文土器、土偶」との記載が認められるが、平成7年に刊行された『能代市史資料編考古』には縄文時代晩期の遺跡として紹介されており、旧石器の記事はない。なお同遺跡は1961年に國學院大学により発掘調査が実施されている。

(4) 土井遺跡 (第1図7、第8図)

土井遺跡は山本郡八森町字土井に所在する。遺跡は秋田県の北西端にあたり、白神山地南西部に発達する段丘上部部に立地する。標高は約45m、沖積面との比高約20m、現汀線までの距離は約1.2kmである。

昭和58年に実施された範囲確認調査により、3トレンチの地山面直上から旧石器が1点出土している^(註13)。

第8図は石刃を素材とした彫器である。彫り面は背面左側縁先端部の細部加工面(急角度調整)を打面として、ここから右側縁に素材長軸に対して斜位に作出される。基端部の打面は背面からの加工により失われるが、かろうじて打点が残存している。長さ11.0cm、幅3.45cm、厚さ1.1cm、重量42.8g、石材は珪質頁岩である。



第8図 土井遺跡出土の旧石器

3. 米代川中流域の遺跡

ここでは二ツ井町、鷹巣町の資料について紹介する。

(1) 竜毛沢館跡 (第1図4、第9・10図)

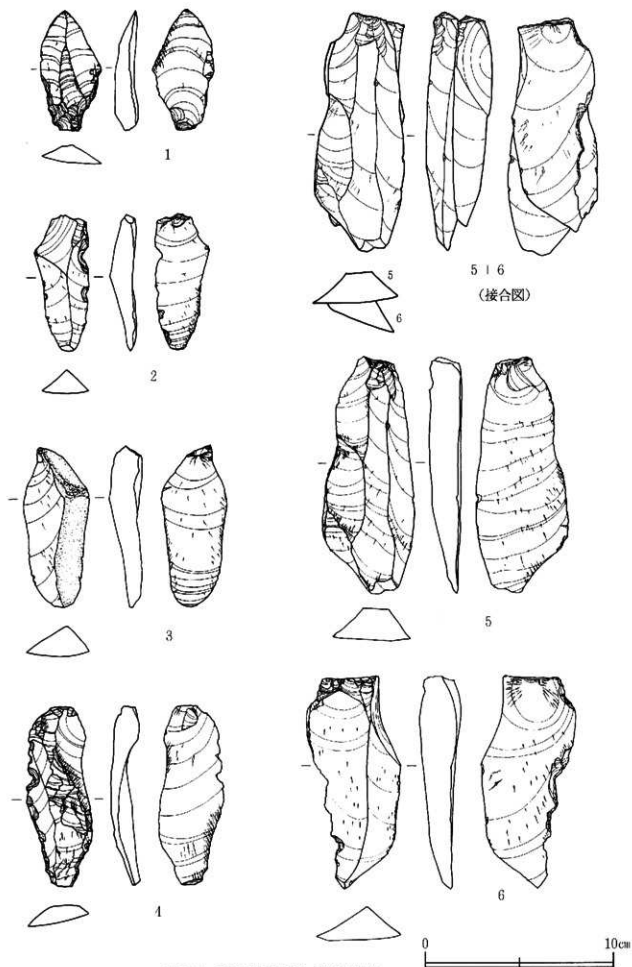
竜毛沢館跡は山本郡二ツ井町切石字竜毛沢に所在する。遺跡は米代川左岸域の段丘端部に立地しており、その標高は51～52m、眼下の沖積面との比高は約35mとなる。国道7号線のバイパス工事に伴う発掘調査が昭和63年に実施されている。調査の結果、縄文時代中期～後期、平安時代、中世の複合遺跡であり、検出遺物の大半は14世紀中頃の「行政的性質の強い館跡」に関連する掘立柱建物跡などであることが判明している。

旧石器時代の遺物は、調査区南端部の第Ⅲ郭で出土している。出土層位は昭和30年代に構築された土堤盛土内であり、原位置を保ってはいない。ただ遺物は、地山粘土と黒色土が互層に積まれた土堤内の地山土中出土であり、土堤近辺の地山崩出土であったことに間違いない。確認できた遺物は12点であり、ナイフ形石器・抉入石器各1点、その他に石刃・縦長剥片・剥片がある。石質は、1が平行ラミナと海綿骨針化石の *Sagarites chitanii* MAKIYAMA が認められる珪質頁岩であり、他は珪質泥岩となる。

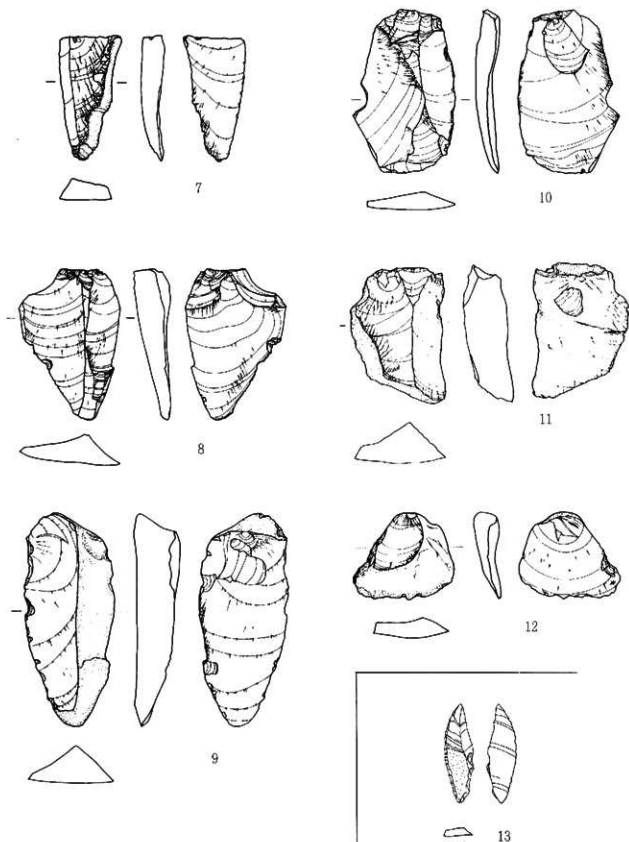
1は幅広で厚みのある縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。基部の急角度調整は素材形状を大きく変えるものであり、調整部位は器長の1/2程に及ぶ。打面は除去されているが、この面は基部側縁調整後に形成されており、意図的な折断というより、偶発的な折れであった可能性がある。長さ6.3cm、幅3.2cm、厚さ1.1cm、重量42.8gである。

5・6は接合資料であり、高さが12.5cm以上の比較的大形の石核(単側面打面)から剥離されている。6は背面左側縁に2箇所の抉入が加えられる。5の先端部及び、その他の縦長剥片等のうち、3・7・9・11・12には礫面が残存している。9と12は原石面を打面とし、3と12は同一原石から剥離された可能性が高い。

以上のことから、遺跡内では珪質泥岩を母岩とする剥片剥離が行われ、比較的大形の石刃・縦長剥片が剥取され、珪質頁岩のナイフ形石器は製品として搬入されたと推定することができる。なお石器実測図は、接合図である5・11・12が今回新たに実測したものであり、他は報告書からの転載である。



第9図 電毛沢館跡出土の旧石器(1)



第10図 電毛沢館跡出土の旧石器(2)

第11図 ニツ井町内出土の旧石器

0 10cm

(2) 上ノ野遺跡 (第1図15)

上ノ野遺跡は山本郡二ツ井町麻生字上ノ野に所在し、米代川とその支流阿仁川の合流点付近の左岸段丘上(標高約33m)に立地する。遺跡は平成9年、町道建設に伴う発掘調査を二ツ井町教育委員会が実施しており、縄文時代の遺構・遺物と共に1034点の旧石器が出土した。定型的な石器は、ナイフ形石器、搔器、錐器であり、その他に石刃・縦長剥片・剥片などが確認されている。詳細は平成10年3月刊行の報告書を参照いただきたい。なお本遺跡については、同町教育委員会生涯学習課和泉昭一氏から教授を得た。

(3) 二ツ井町出土 (第11図)

『秋田県の考古学』^(註15)によると、二ツ井町内でナイフ形石器が採集されているが、発見地点は未確認のことである。同書には実測図(富樫泰時氏図)と次の解説が示されている。第11図は「…縦長剥片から作られている。基部が調整され、打面は残っていない。基部の左右には加工がみられ、左側は先端まで及んでいる。背面の剥離面二つは主要剥離面とは逆の方向からの打撃によって作られている。実測図からの計測では、長さ5.2cm、幅1.6cm程の小型の製品である。なお、この石器は二ツ井町の故吉田礼三氏が所蔵していたものである。

(4) 脇神館跡 (第1図16)

脇神館跡は、北秋田郡鷹巣町脇神字タカラノ沢に所在する。米代川の支流小猿部川左岸の台地上に立地し、その標高は約70m、沖積面との比高は40～45mである。大館能代空港建設に伴うアクセス道建設工事に係る調査が平成8年に実施され、縄文時代(散布地)、平安時代(集落跡)、中世(城館跡)、近世(塚)の各時代の遺構・遺物が確認された。^(註6)報告書は平成11年に刊行予定である。

旧石器時代の遺物はナイフ形石器1点が確認されている。調査区南部の地山漸移層出土であり、出土地点を中心とする区域の地山面を精査したが他に旧石器時代の遺物は確認できなかった。石器は両設打面の石核から剥離された石刃を素材とするもので、二側縁基部に錯向剝離を有し、その後基部が折断される。なお先端部も折れているが、折断面の風化度合いから後世の行為と思われる。現存する長さ5.4cm、最大幅2.9cm、厚さ0.9cmであり、石質は珪質泥岩である。遺物は現在、秋田県埋蔵文化財センターで保管している。

4. 森吉山麓の遺跡

ここでは森吉町、阿仁町で確認された資料について紹介する。森吉町では平成7年に実施された森吉山ダム建設事業に伴う範囲確認調査により3遺跡から旧石器^(註17)が出土している。石材はいずれも珪質泥岩・頁岩である。遺物は現在、秋田県埋蔵文化財センターで保管している。

(1) 二重鳥A遺跡・二重鳥B遺跡 (第1図17)

両遺跡は北秋田郡森吉町森吉字二重鳥にあり、米代川支流で森吉山の北を西流する小又川左岸の丘陵地先端部に立地する。標高は150m前後であり、A遺跡・B遺跡は、約100m離れている。

二重鳥A遺跡では、縄文時代晩期を中心とする遺物と共に、小形縦長剥片を素材とした搔器、剥片等が出土した。

二重鳥B遺跡では、縄文時代後期を中心とする遺構・遺物と共に、ナイフ形石器、縦長剥片等が出土した。ナイフ形石器は長さ15.5cm、幅2.5cm足らずの細身の形状を示し、基部両側縁と先端部1側縁に調整剝離が認められる。横断面は三角形を呈する。

(2) ネネム沢A遺跡(第1図18)

遺跡は北秋田郡森吉町森吉字ネネム沢にあり、小又川右岸の丘陵地先端部に立地する。二重鳥A・B遺跡より2km程上流部に位置する。標高は約180mである。

調査の結果、縄文時代・古代の遺構・遺物と共に人形でやや幅広い縦長剥片、二次加工のある剥片、剥片等が出上した。

(3) 戸島内遺跡

戸島内遺跡は北秋田郡阿仁町戸島内字家の前にあり、森古山の南山麓、打当川右岸に位置する。標高は263m、現況は水田である。森古町の3遺跡は本遺跡の北約15kmに所在する。「秋田県遺跡地図(東北版)^(註18)」によると、ここでは「縄文土器(晩期)、注口土器、浅鉢型土器、石鎌、石匙、石錘」と共にナイフ形石器が採集されているが詳細は不明である。遺物は阿仁町教育委員会が所蔵している。

5. 米代川中・上流域の遺跡

鷹巣町より上流域に立地する遺跡は、大館市の松木高館平遺跡1箇所が知られるにすぎず、鹿角地方での確認例はない。

(1) 松木高館平遺跡(第1図19)

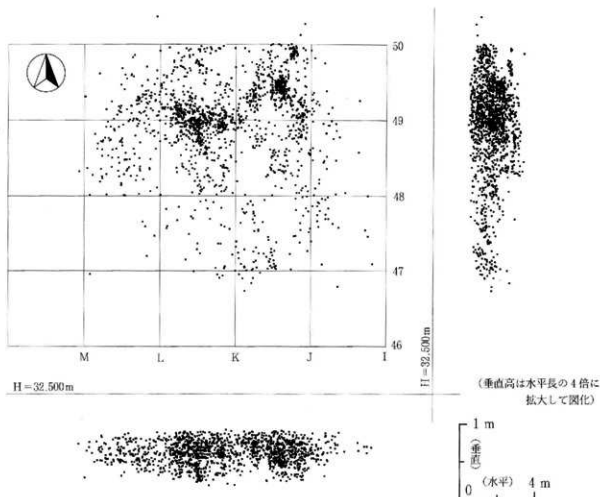
遺跡は大館市松木字高館平に所在し、米代川右岸域の支流、花岡川と下内川の合流点西側の高館山西麓に立地する。標高は110mであり、沖積面との比高は60mに及ぶ。ここから昭和61年1月、整地作業中偶然に6点の大型の石刃・縦長剥片が出上した。石器には「ローム上が付着している」ことから、層位的に問題はない。最大の石刃は、長さ22.8cm、最大幅3.8cm、最大厚1.4cm、重量108.2g、最小でも長さ9.6cm、最大幅3.6cm、最大厚1.1cm、重量48.2gであることからいずれも大型の遺物であることが分かる。石材は「すべて硬質(珪質)頁岩」であり、「石器の側縁には鋭い刃が形成されていて、使用による細かな刃こぼれ」が見られる。遺物は現在大館市郷土博物館に展示されており、「大館の歴史」^(註20)、「図説 秋田県の歴史」^(註21)には石器の写真が掲載されている。

6. 此掛沢Ⅱ遺跡(第1図6)

此掛沢Ⅱ遺跡は能代市浅内字此掛沢に所在する。海成段丘である成合台地の北部は浅内台地と称されており、遺跡はこの台地北縁に立地している。標高は約31m、沖積面との比高は20m程である。同じ成合台地に占地する逆川遺跡は、南東約2kmに位置する。遺跡は昭和58年、国営能代開拓事業に伴う発掘調査が実施され、縄文時代・平安時代の遺構・遺物と共に旧石器の集中箇所1カ所が検出された。^(註22)

(1) 石器の分布(第12図)

出土した旧石器は総数で約1,750点である。石器の出土層位・点数は、地山層であるⅢ層・Ⅳ層上部(明褐色火山灰土)に約1,700点、その上位層(盛土中)から約50点である。石器の分布は第12図に示したように、南北14.5m、東西15.5mの範囲内に位置するが、概ね径約14.5mの円内に集中すると見ることができる。また石器の出上高低差は最大で73cmである。これらの石器群は、上層の観察、接合関係から「一時期に製作され残された」ものとされるが、高低差の存在については、石器群残置後の凍着凍上現象及び「凍結割れ」への石器の落ち込み等の(化石)周水河現象に伴う作用によると考えられる。同様の事例は琴丘町家の下遺跡、秋田市下堤G遺跡でも確認している。なお第12図は「家の下遺跡(2)」報告書執筆の際に、パーソナ



第12図 此掛沢Ⅱ遺跡出土の旧石器の水平・垂直分布図

ルンピューターを使用して座標値を入力し、CADに展開して作成した分布図を転載したものである。

(2) 出土石器 (第13・14図)

出土した石器はナイフ形石器12点、米ヶ森型台形石器172点、石斧2点、その他石刃、石核、剥片、碎片である。石材は、石斧が泥板岩(20)と石英安山岩(47)、その他では黒曜石19点以外は、珪質泥岩・頁岩である。

ナイフ形石器は調整技術の見られない石刃技法により得られた石刃・縦長剥片を素材とし、基部の両側縁もしくは一方の側縁の背面側にのみ細かい二次加工を施すが、打面は取り除かれることなくそのまま残置している。石器は先端部の形状によって2種類に分けている。Ⅰ類は先端の尖るもので、基部のほかに一方の先端に細かい二次加工の施されるもの、施されないものがある。Ⅱ類は先端が幅広(へら状)になっているもので先端に細かい二次加工のあるものとないものがある。

米ヶ森型台形石器はA種、B種に分けている。A種は米ヶ森遺跡から出土した石器そのものであり、長幅比(全長:最大幅)が1:1前後の石器である。B種は幅が長さのおよそ2倍かそれ以上に幅が広い石器であり、内外村小出Ⅰ遺跡における台形様石器4類と同形態と見ることができ(註33)。これらの小型石器はその規格性から、石核より目的剥片として得られた剥片そのものを石器として認定しており、明らかに末端などに二次加工をもつ石器は、172点中64点(37.2%)であることも周知しておく必要がある。

石斧は1点が局部磨製石斧(20)で、もう1点(47)は「裏面側は刃部に剝離痕があるほかはツルツルしているが、これが研磨によるものか自然面なのかははっきりしない」ものである。なお後者は、「報告書」刊行後に石斧であることに気づいたものであり、『能代市史資料編 考古』に掲載されているものを転載した。

この遺跡では剥片剝離作業を行った母岩は約20個体確認され、そのうち定型石器が得られている母岩は16個体である。母岩から得られる石器によってⅠ～Ⅴ類に分類されているが、母岩の段階では石刃生産、米ヶ森型台形石器の素材生産の区別がなく、分割、粗制段階後にそれぞれの母岩が選択されたと考えられる。また母岩の観察と接合関係からナイフ形石器に着目すれば、1点(報告書第27図147)以外は、「此掛沢Ⅱ遺跡以外で製作され、ここに持ち込まれたもの」と考えられる。

(3) 遺跡の編年の位置とその評価

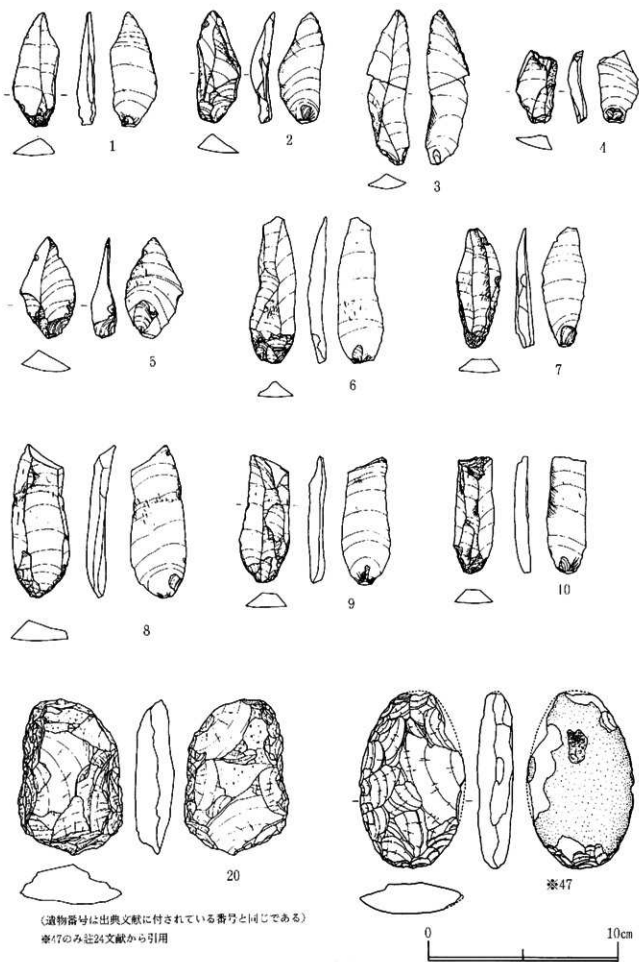
石器群の年代については、報告者である大野憲司氏は、石器組成などから「おおむねA T降下前後の石器群である」と明記している。この時代、後期旧石器時代前半期には秋田県下において多くの遺跡・資料が確認されている。すなわち河辺町風無台Ⅰ遺跡・風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡・松木台Ⅲ遺跡、秋田市下堤G遺跡・地蔵田B遺跡、南外村小出Ⅰ遺跡、及び琴丘町家の下遺跡がある。これらの遺跡はそれぞれ様相が異なる。調整技術を用いない石刃技法で生産された縦長剥片を素材とする基部調整ナイフ形石器と長幅指数100前後の剥片を素材とした台形椗石器を組成するものとして風無台Ⅰ・松木台Ⅲ・下堤G・此掛沢Ⅱ・家の下遺跡がある。また石刃技法、基部調整ナイフを持たず台形椗石器(ペン先形ナイフを含む)のみで構成される石器群として風無台Ⅱ・松木台Ⅱ・地蔵田B遺跡があげられる。この様相の違いはある一定の時間幅における行動の差異か、年代差によるものかは難しい問題であるが、年代差による可能性が強い。以下では此掛沢Ⅱ遺跡を取り巻く県内各遺跡の編年の位置とその評価についてまとめて見る。

大野憲司氏は、風無台Ⅰ・松木台Ⅲ遺跡の石器群は剥片生産技術の中に占める石刃技法の割合が低いことを根拠として、松木台Ⅲ遺跡が風無台Ⅰ遺跡よりわずかに先行すると述べている。また風無台Ⅱ・松木台Ⅱ・地蔵田B遺跡の石器群と松木台Ⅲ・風無台Ⅰ遺跡の石器群を2系統に分け、此掛沢Ⅱ・下堤G遺跡に先行する石器群と考えた。

田村隆氏は風無台Ⅰ・松木台Ⅲ遺跡の石器群が石刃技法のない風無台Ⅱ・松木台Ⅱ遺跡の台形椗石器を主体とする石器群の一部と共通性が認められることを根拠とし、これらを二項的な構造を持つほぼ同時期のものとし、米ヶ森技法を持つ此掛沢Ⅱ遺跡の石器群より古い時期とした。

石川恵美子氏は台形椗石器の型式的な差をもとに石刃技法のない風無台Ⅱ・松木台Ⅱ・地蔵田B遺跡と石刃技法が伴う下堤G・此掛沢Ⅱ遺跡は変遷過程が進めることを根拠として、前者が後者より古いと結論づけた。また小出Ⅰ遺跡の台形椗石器は型式的にも技術的にも、この前者から後者への過渡期的様相を示す資料であり、米ヶ森型台形石器成立に関与する石器群と評価している。

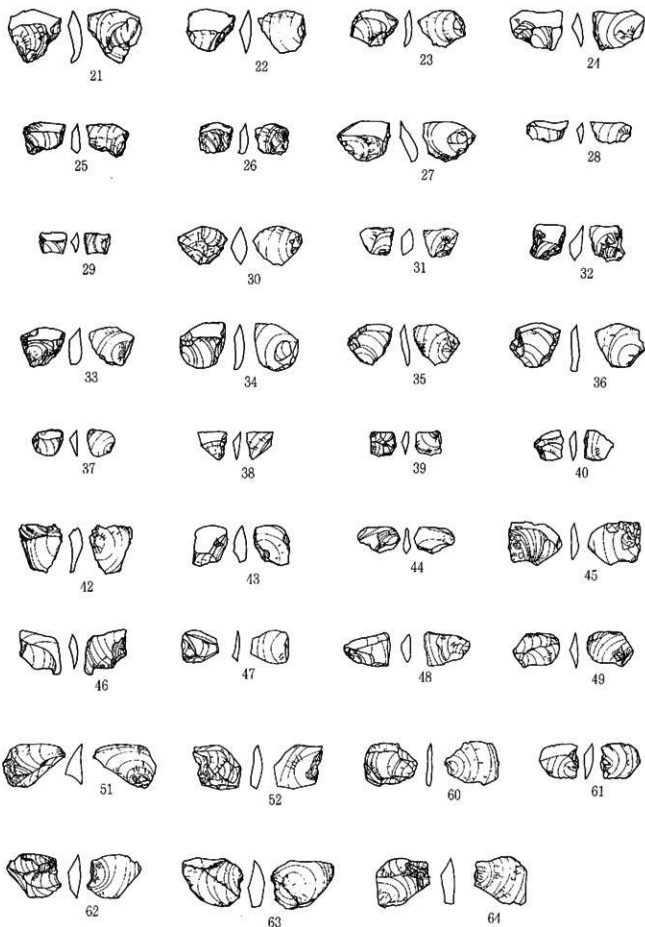
渋谷孝雄氏は上記各氏の見解を引用し、(古)風無台Ⅰ・松木台Ⅲ→此掛沢Ⅱ(新)、小出Ⅰ→此掛沢Ⅱという変遷を導きだした。さらに風無台Ⅰ・松木台Ⅲ・小出Ⅰ遺跡の先後関係については、次の変遷過程を想定している。風無台Ⅰ遺跡は米ヶ森型台形石器がわずかに存在し、またその剥片を生産する技術も存在することから此掛沢Ⅱ遺跡に最も近いと位置づけた。小出Ⅰ遺跡は多様な生産技術から供給される剥片素材の台形椗石器が主体となり、同一個体の剝離工程中に台形椗石器、ナイフ形石器の両者の石器素材が認められる例が多く存在する。これは二極構造では理解できず、石刃技法の初めの段階に位置する遺跡と考えた。従って、石刃技法が安定して存在する松木台Ⅲ遺跡の石器群に先行する。以上から(古)小出Ⅰ→松木台Ⅲ→風無台Ⅰ→此掛沢Ⅱ(新)という変遷が導かれた。また石刃技法を持たない台形椗石器主体の風無台Ⅱ・松木



(遺物番号は出典文献に付されている番号と同じである)

※47のみ注24文献から引用

第13図 此掛沢Ⅱ遺跡の旧石器(1)



(遺物番号は山内文献に付されている番号と同じである)

第14図 此掛沢II遺跡の旧石器(2)



台Ⅱ・地蔵田B遺跡は小出Ⅰ遺跡の石器群をさかのぼる年代的位置づけが可能であるとしている。

また佐藤宏之氏は南関東地方の石器群と比較し、立川ローム層の標準土層堆積の表現を利用してこの石器群の編年の検討を行っている。台形様石器Ⅱ類（ベン先形ナイフ）の特殊化の進行という観点から風無台Ⅰ・松木台Ⅱ遺跡はIX層下部段階と定めた。風無台Ⅱ遺跡はIX層上部段階、此掛沢Ⅱ遺跡はVII層下部段階、地蔵田B遺跡は基部加工の規格化したⅡ類と共に急斜度調整技術の採用がみられるようになりVIII層上部段階とした。松木台Ⅲ遺跡も同じくVII層上部段階に位置する。小出Ⅰ遺跡は特徴的な後皿型台形様石器を主体的に検出するためVII層最上部に位置するとしている。以上より（占）松木台Ⅱ・風無台Ⅰ→風無台Ⅱ→此掛沢Ⅱ→地蔵田B→松木台Ⅲ→小出Ⅰ（新）という変遷が示されている。^(註31)

一方、藤原紀敏・柳田俊雄氏は東北地方後期旧石器時代前半期の石器群をA～Dグループに分類した。この分類によると風無台Ⅱ・松木台Ⅱ・地蔵田B遺跡はベン先形ナイフ形石器を伴うBグループに属する。風無台Ⅰ・松木台Ⅲ遺跡はCグループに属し、調整技術を伴わない石刃技法からナイフ形石器を、また打面と作業面を頻りに移動させながら幅広の剥片を剥離する技術から台形様石器を製作する。此掛沢Ⅱ・下堤G遺跡はDグループに属する。調整技術を伴わない単段打面を主体とする石刃技法と、剥片を素材としその背面側を打面、腹面側を作業面としながら台形扇形の小型剥片を連続剥離する米ヶ森技法を伴う。両氏はこの3グループを占いほうからB→C→Dと変遷すると推測している。Bグループの剥片の一部に急斜度調整を施し基部を中心に面的な加工を施すものがC、Dグループより古期の様相としC、Dグループの差異は台形様石器の製作技術と石刃技法の特徴に求めている。Cグループの台形様石器は面的加工を持つものがほとんどなく、Dグループは規格性の強い米ヶ森型台形石器を大量に産する。このことからDグループのほうが新期に属するとした。^(註32)

次に此掛沢Ⅱ遺跡も属する米ヶ森型台形石器を産する石器群は、他に米ヶ森遺跡、下堤G遺跡などが挙げられるが、富山県を中心として分布する立野ヶ原系石器群との関連も指摘されてきた。立野ヶ原系石器群は寸づまりな小型剥片の末端部に部分的な二次加工を施す立野ヶ原型ナイフ形石器が出土した石器群である。奥村吉信氏はこの立野ヶ原型ナイフ形石器と米ヶ森型台形石器の形状における共通点として規格性のある小型剥片を素材とし主に末端部に部分的な二次加工を施すことを挙げ、また剥片剥離技術は両石器群ともに類似すると指摘した。相違点としては米ヶ森型台形石器を産する石器群では石刃技法が伴い石材はほぼ頁岩に限られるのに対し、立野ヶ原系石器群では石刃技法が見られず、石材はメノウなど在地の石材が多用されることを挙げている。以上より両石器群が東日本の日本海側では石刃技法との接触を通して独自のまとまりを形成しはじめ、富山平野や西日本では本来的な技術文化を純粋に進展させた^(註33)と結論づけた。

また石川県富山遺跡で出土した米ヶ森型台形石器に関しては立野ヶ原型ナイフ形石器を保持した旧石器集団が占拠した活動領域の中に、東北地方を活動領域とした旧石器集団が何らかの要因を契機として進出した^(註34)という背景を考え、ほぼ同時期に存在した石器群であるとした。

それではこの両石器群には深い関連があるということを踏まえて述べてみたい。米ヶ森型台形石器群の米ヶ森・此掛沢Ⅱ・下堤G遺跡は米ヶ森型台形石器を比較すると若干の違いが見られる。米ヶ森・下堤G遺跡は刃部の形状が彎曲し凸状を示すものがそれぞれ82%、90%だが此掛沢Ⅱ遺跡は51%にとどまる。また、剥離方法でみると米ヶ森技法である打点を移動させながら行う剥離が米ヶ森・下堤G遺跡ではそれぞれ70%、85%となるが、此掛沢Ⅱ遺跡では打点を転移して行う剥離が45%にみられる。米ヶ森技法が安定した技術で剥片を剥離する方法であるため確立した米ヶ森技法の影響を強く受ける米ヶ森・下堤G遺跡が此掛沢Ⅱ遺跡より後出の遺跡ではないかと推測する。また立野ヶ原系石器群をみでみることにする。立野ヶ原型ナイフ形

石器を産する代表的な遺跡として富山県立山町白岩藪ノ上遺跡、城端町ウウダイラⅠ、ウウダイラⅡ遺跡が挙げられる。この白岩藪ノ上遺跡のナイフ形石器は立野ヶ原型ナイフ形石器の部分的な二次加工と異なり、対側側縁にまで二次加工が及ぶものが33%を占め、ウウダイラⅠ遺跡の15%、ウウダイラⅡ遺跡の10%からみると割合が高い。また剥片剝離技術もウウダイラⅠ・Ⅱ遺跡は打点を90度転移させサイコロ状の残核を残す方法がそれぞれ74%、55%を示すが、白岩藪ノ上遺跡は打面を固定し横に移動する方法が60%と半数以上を占め、より規格性のある剥片を剝離できる。以上から(古)ウウダイラⅠ・Ⅱ遺跡→白岩藪ノ上遺跡(新)という変遷が想定できる。この想定から両石器群間の関連を見ると、形状では刃部の形状で白岩藪ノ上遺跡と米ヶ森型台形石器を産する石器群が近似する。長幅比は立野ヶ原系石器群が1:1~1.4、米ヶ森型台形石器を産する石器群は1:0.8~1.1と立野ヶ原系石器群がやや縦長だが、白岩藪ノ上遺跡は米ヶ森型台形石器を産する石器群と近似する分布をなしている。また、剝離方法は打面を固定して横に移動する方法が主体となる傾向が同様に見られる。なかでも白岩藪ノ上遺跡は此掛沢Ⅱ遺跡と非常に近い特徴を持つ。このことより立野ヶ原系石器群がウウダイラⅠ・Ⅱ遺跡が白岩藪ノ上遺跡へと技術的に移行した後の技術基盤と米ヶ森型台形石器を産する石器群の初期に位置する此掛沢Ⅱ遺跡の技術基盤が類似するということがいえるのではないかと(註36)。

7. 鴨子台遺跡(第1図3)

鴨子台遺跡は山本郡八竜町鶴川字鴨子台に所在し、成合台地の南西端に立地する。遺跡が位置する台地面は平坦ではなく中央が窪地状を呈し、標高が34~37m程、沖積面との比高は25m前後となる。琴丘能代道路建設事業に伴う発掘調査が平成2年に実施され、縄文時代・古代以降の遺構・遺物と共に、旧石器のブロックが5箇所^(註37)で確認された。

(1) 石器の分布(第15図)

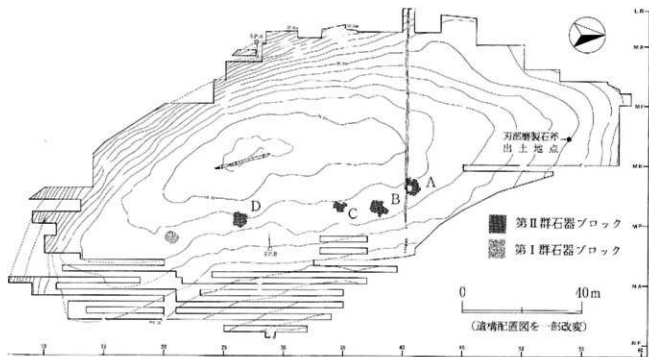
旧石器は5つのブロックから計977点出土した。そのブロックは便宜上新田に分けて捉えており、前者を第Ⅰ群石器、後者を第Ⅱ群石器としている。第Ⅰ群は調査区の南東隅の1ブロックで径4m程の範囲を中心に12点確認した。石器の出土層位は更新世堆積層である第Ⅲ層(粘土層)のうちのa層(漸移層)を中心とする。第Ⅱ群は調査区の東側に沿った4ブロック(A~D)が検出された。各ブロックは径約4~6m程の範囲に集中し、Aブロック341点、Bブロック521点、Cブロック40点、Dブロック45点、その他ブロック外18点となる。石器の出土層位は、AブロックがⅡb層(クロボク層)下部からⅢb層上部まで、BブロックはⅡb層を中心に、C・Dブロックは、Ⅲa層にほぼ限定される。

(2) 出土石器(第13・14図)

第Ⅰ群石器は、両面調整石器の削片1点、搔器2点、二次加工のある削片1点、削片8点であり、全て珪質泥岩・頁岩を素材としている。第Ⅱ群石器は、ナイフ形石器10点、彫器18点、彫器削片16点、搔器5点、錐器1点、削器3点、環状石製品1点である。

ナイフ形石器はいずれも縦長削片を素材とし、二側縁に細部加工を施して先端、基部ともに尖った形状に仕上げる点で共通する。また一側縁の加工がその全部にわたるものと、基部と先端部に限定されるものに分けられる。前者は素材の剝離軸と石器長軸とにズレがあるため急角度調整を施して一側縁を断ち切るように整形するが、後者は全体的にその素材形状を保持している。基部における細部加工は腹面から背面に施される急角度加工という点ではすべてに共通するが、腹面側にも平坦加工を施すものもある。

彫器は基本的に縦長削片を素材とするが、ナイフ形石器に比較し素材は多様である。刃部はその末端側か



第15図 鴨子台遺跡旧石器ブロック分布図

打面側の方に彫刻刀面を出し製作されている。

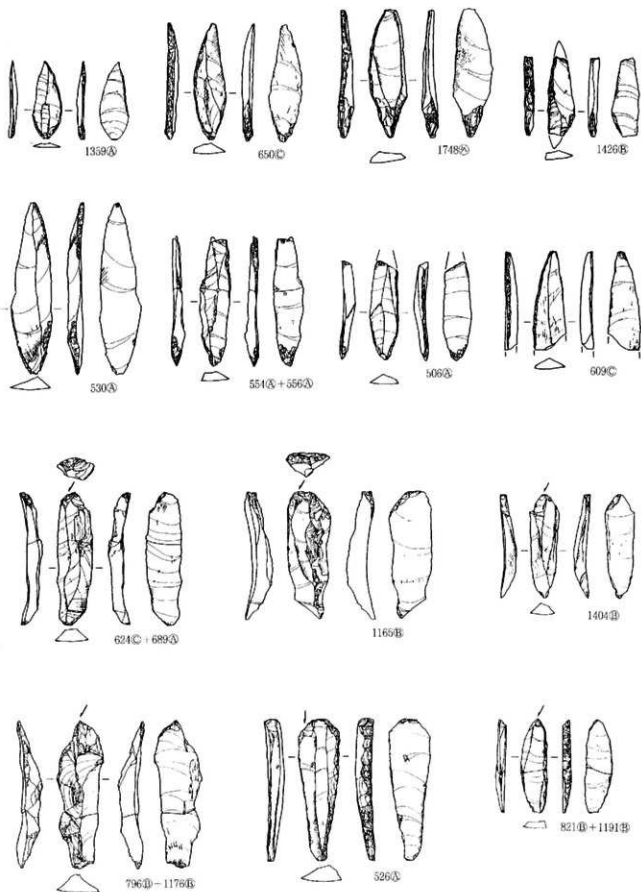
これらの石器は28個の原石に分けられ、このうちの11個の原石で目的削片剥取やその準備が行われていた。さらに、その中の8個は原石や原石が荒割りされた状態で遺跡に運び込まれていた。

(3) 遺跡の編年的位置とその評価

鴨子台遺跡は出上ブロックから第I群と第II群に分けられたが、第II群はナイフ形石器の型式的な位置づけから考えると、杉久保型、茂呂型に近い特徴を持つが典型的なものは見られない。秋田市下堤G遺跡、山形県金谷原遺跡などの基部加工ナイフ形石器から発展し、二側縁加工ナイフ形石器の特徴も併せて出現したものとみることができる。このことから年代的位置づけは上記2遺跡よりも鴨子台遺跡は後出とされた。第I群は細石刃核を取付した石核の最初の段階の削片と判断され、後期旧石器時代終末期に位置すると考えられる^(註37)。

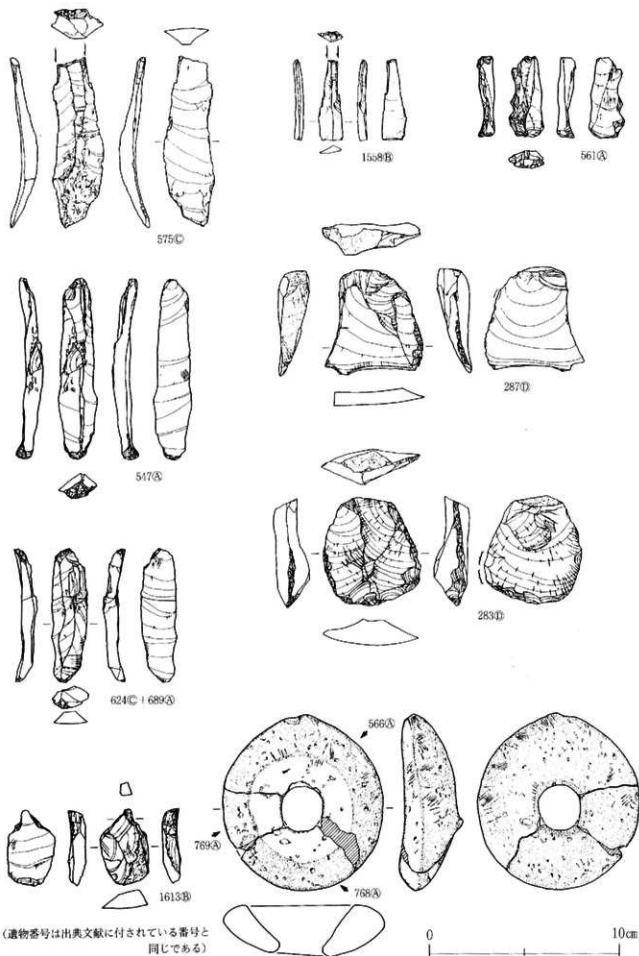
また須田良平氏は本遺跡の第II群石器を南関東のV～IV下層段階にあたりとし、東北地方の他の石器群との比較を行っている。南関東V～IV下層段階の石器群は藤原敏氏の分類では石刃技法の調整技術を駆使するものとしてII群（調整技術を伴わないI群に後続する段階）とされているが、須田氏はII群をさらにA、B群に分類した。鴨子台遺跡の石器群は基部を念入りに加工して尖らせた形態を呈する杉久保型ナイフ形石器と山形型彫刻刀形石器を保有するII A群に属し、山形県横道遺跡、協和町米ヶ森遺跡と同時期に存在した遺跡と考えている^(註38)。

一方沢田敦氏は鴨子台遺跡の道具としての石器の少なさに着目し、類似する石器組成をもつ新潟県上ノ平遺跡（A地点）との比較を行い、鴨子台はベースキャンプ的な性格、上ノ平はワークキャンプ的な性格を持つ遺跡であったとまとめている^(註39)。このようにほぼ同時期に存在した遺跡において、その石器組成だけではなく石核、削片、削片の種類、割合からその遺跡のもつ性格をも復元することが可能である。鴨子台遺跡は米代川流域の同時期に存在した遺跡のベースキャンプ的な存在の遺跡としての役割を担っていたといえよう。今後、同遺跡から石器素材を持ち出し、日帰りでは何かの作業を行っていたワークキャンプ的な役割をもつ周辺の遺跡についての調査が行われることを期待したい。



(遺物番号は出典文献に付されている番号と同じである)

第16図 鴨子台遺跡の旧石器(1)



(遺物番号は出典文献に付されている番号と同じである)

第17図 鴨子台遺跡の旧石器(2)

8. おわりに

小稿は琴丘町家の下遺跡の整理作業・報告書作成過程における副産物として生み出された集積資料の提示を主として成ったものである。従って当該地域全体を見通した考察やまとめについて、その準備はない。ただ現在までのところ米代川流域における最も古い段階の遺跡は、此掛沢Ⅱ・逆川や家の下であり、それは後期旧石器時代前半期の石刃技法が確立した段階（調整技法は伴わない）、おそらくA T降下（直）前と明示することはできよう。このことから、秋田市・河辺町の御所野台地・七山台地などで確認されている石刃技法をもたない石器群を保有する遺跡の発見例は本流域にはないことになる。また最も新しい段階は、鴨子台遺跡第Ⅰ群石器であり、後期旧石器時代終末期に位置させることができる。一方館下Ⅰ・竜毛沢館・上ノ野・脇神館・松木高館平・鴨子台第Ⅱ群石器などは両段階の間を埋める資料となるが、より前者段階に近いと考えられる。

なお小稿は、表記2名の協議を経て執筆しているが、草稿段階では逆川・館下Ⅰ・此掛沢Ⅱ・鴨子台に関する記述を上藤が、他は高橋が担当したものである。

注

- 1 秋田県教育委員会『家の下遺跡（1）』『県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第256集 1996（平成7年）
- 2 秋田県教育委員会『家の下遺跡（2） 旧石器時代編一』秋田県文化財調査報告書第275集 1998（平成10年）
- 3 秋田県教育委員会『逆川遺跡』遺跡詳細分布調査報告書 秋田県文化財調査報告書第93集 1982（昭和57年）
- 4 武田孝義『逆川遺跡』『能代市史資料編 考古』1995（平成7年）p104～106
- 5 永瀬源男『旧石器時代』『山本町史』1979（昭和54年）p65～66
- 6 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（中央版）』1990（平成2年）
- 7 小林忠美『八竜町館の上遺跡出土のナイフ形石器について』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 1992（平成4年）
- 8 秋田県教育委員会『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第62集 1979（昭和54年）
- 9 大槻久馬『能代市周辺の遺跡について』『秋田考古学』第32号 1975（昭和50年）
- 10 富塚泰時『大槻久馬氏のこと』『秋田考古学』第32号 1975（昭和50年）
- 11 秋田県立博物館『秋田県立博物館収蔵資料目録 考古』1982（昭和57年）
- 12 能代市史編さん委員会『能代市史資料編 考古』1995（平成7年）
- 13 秋田県教育委員会『十井遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第111集 1984（昭和59年）
- 14 秋田県教育委員会『竜毛沢館発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第188集 1990（平成2年）
- 15 豊島岳『先土器文化』『秋田県の考古学』1967（昭和42年）p15～16
- 16 秋田県埋蔵文化財センター『脇神館跡』『秋田県埋蔵文化財報告会資料』1998（平成10年）
- 17 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第267集 1996年（平成8年）
- 18 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県北版）』1991（平成3年）
- 19 板橋範芳『人館市・松木高館平遺跡』『遺跡は語る55 第二部米代川流域でのいとなみ』秋田魁新報 1998（平成10年）3月12日付
- 20 人館市教育委員会『大館の歴史』1992（平成4年）p23～26
- 21 富塚泰時『最初の住人たち』『図説 秋田県の歴史』河川書房新社 1987年（昭和62年）p22

- 22 秋田県教育委員会『此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第114集 1984（昭和59年）
- 23 秋田県教育委員会「小山Ⅰ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』秋田県文化財調査報告書第206集 1991（平成3年）
p.21～213
- 24 大野憲司「此掛沢Ⅱ遺跡」『能代市史資料編 考古』1995（平成7年）p.84～103
- 25 註24と同
- 26 藤原紀敏「ナイフ形石器と石刃技法の展開—東北の後期旧石器文化」『新版 古代の日本』第9巻 東北・北海道 角川書店 1992（平成4年）p.38～40
- 27 大野憲司「秋田県の旧石器時代における割片生産技術について」『日本海地域における旧石器時代の東西交流』北陸旧石器文化研究会・近畿旧石器文化交流会 1986（昭和61年）
- 28 田村隆「二項的モードの推移と巡回—東北日本におけるナイフ形石器群成立期の様相—」『先史学研究』2 1989（平成元年）
- 29 註23と同
- 30 渋谷孝雄「東北地方における石刃技法出現期の石器群について」『古代探叢Ⅳ—滝口宏先生追悼考古論集』早稲田大学出版部 1995（平成7年）p.173～208
- 31 佐藤宏之「日本旧石器文化の構造と進化」柏書房 1992（平成4年）p.229～234
- 32 藤原紀敏・柳田俊雄「北海道・東北地方の様相—東北地方を中心として—」『石器文化研究』3 石器文化研究会 1991（平成3年）
p.151～163
- 33 奥村吉信「立野×原系石器群と米×森技法」『大境』第11号 1987（昭和62年）p.5～16
- 34 奥村吉信「北陸の後期旧石器時代の石器群」『旧石器考古学』37 1988（昭和63年）p.17～24
- 35 工藤直子が平成8年度富山大学に提出した卒業論文「立野ヶ原系石器群と米ヶ森型台形石器を産する石器群との関連についての考察」に基づく。
- 36 秋田県教育委員会「鴨子台遺跡」『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第230集 1992（平成4年）
- 37 註36と同
- 38 須田良平「東北・北海道—東北地方を中心に—」『石器文化研究』5 1996（平成8年）p.465～500
- 39 沢田敦「氷期を生きた人びと」『ここまでわかった日本の先史時代』角川書店1997（平成9年）
新潟県教育委員会『磐越自動車道関係発掘調査報告書—上ノ平遺跡A地点』1994（平成6年）

東北以北の双耳環と環状凸帯付長頸瓶

利 部 修

1 はじめに

奈良・平安時代の東北地方以北における土器の生産と流通は、律令国家の城柵設置地域との関わり方が大きく影響している^(註1)。従って、城柵設置の有無による須恵器の窯業生産は、城柵設置地域より南の地域(A)、城柵設置地域(B)、城柵設置地域より北の地域(C)、と3つに区分することができる^(註2)。各地域ごとの生産体制は、従来、例えば多賀城と関連している日の出山窯跡群などのように、近隣における需要と供給関係を基盤に置く、とする理解であった。

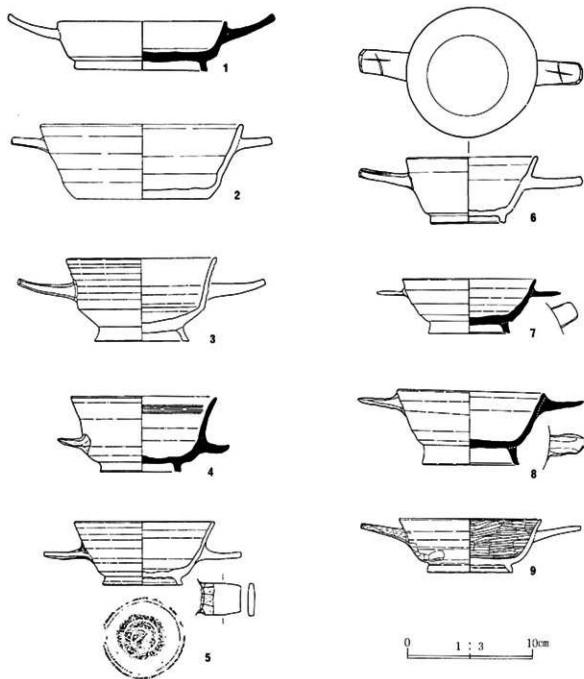
ところが、福島県大戸古窯跡群のように多賀城やその周辺地域まで製品が流通するなど、AからBへの広域的な流通視点に立った解釈も必要になってきている^(註3)。また、Cの青森県五所川原窯跡群では、北海道を視野に入れた独自の広域な流通機構をもつことも分かってきている^(註4)。いづれにしても、律令国家による城柵設置支配の推進に当たっては、主に8世紀はAの9世紀ではBにおける須恵器窯業生産とその流通機構の安定が、征夷展開の重要な施策の1つであったことは確かであろう。そしてCの須恵器生産は、地理的にBを境としたAの対極に位置するものであった。つまり、Cのそれが10世紀を中心としていることは、大局的には8世紀Aの北域に当たる9世紀Bを終了、窯業技術の漸移的伝播が想定される訳である。これらのことは、東北地方の列島における律令期須恵器生産の末端状況を良く伝えている点で興味深い。

以上を総体的に見れば、東北地方の窯業生産は、関東および北陸以西の生産・流通体制とはおのずと異なっていると考えられ、それが生産器種の在り方にも現れているものと予想される。このような観点から、以下に双耳環と環状凸帯付長頸瓶(従来はリング付長頸瓶などと表記)の2種を取り上げ、東北地方と北海道における須恵器の生産と流通の一端を論じてみたい。

2 双耳環の分布

双耳環は、主に坯体部の相対する位置に一對の把手(耳)が付く須恵器の器で、奈良時代から平安時代にかけて認められる(第1図)。この器種は高台のある例がほとんどであるが、東笠子遺跡群(同一2)や長岡京跡では無高台のものも見られる。把手は長い板状形態が多く、中には平城京跡の突起状のものや、杉山古墳(京都府大安寺旧境内)の環状把手など特殊な例も認められる^(註5)。

双耳環は全国的に出土例が少なく、畿内やその周辺での在り方も同様のようである。平城京や平安京をはじめ、猿投窯跡や湖西窯跡群など東海諸窯においても、管見資料で30例は見当たらないし、陶器窯跡の報告例もない。なかでも、岐阜県須南窯跡群中の稲田窯跡においては5基11個の出土が報告されており(同一1)、このうち古いものは、双耳環の中でも最も古い段階と考えられる8世紀中葉の年代観が与えられている^(註6)。このように出土例の極めて少ない傾向は、関東・北陸・中部の各地方においても同じである^(註7)。



1 福田山第13号窯
(各務原市教育委員会, 1983.)

2 東笠子遺跡群日K24地点II号窯
(静岡県湖西市教育委員会, 1983.)

3 伊治城跡SI-173住居跡
(蒲原町教育委員会, 1991.)

4 沼田遺跡SK230土壇
(山形県教育委員会, 1984.)

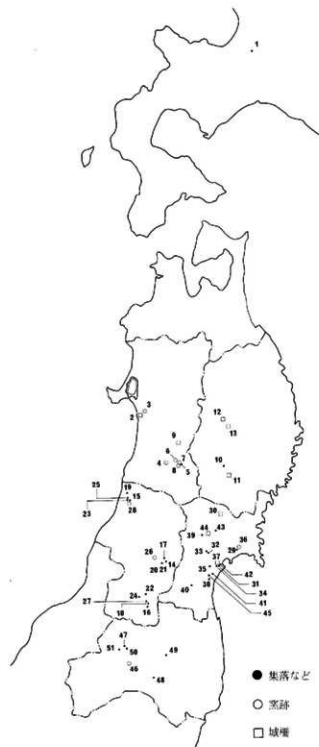
5 多賀城跡SI2160A 竪穴住居跡
(宮城県多賀城跡調査研究所, 1993.)

6 富ヶ沢田遺跡S.1101・1025灰原
(秋田県教育委員会, 1992.)

7・8 大戸古窯跡群M-19灰原
(会津若松市教育委員会, 1984.)

9 上浅川遺跡KY49 (確認調査)
(米沢市教育委員会, 1985.)

第1図 双耳環の類例



第2図 双耳環出土遺跡の分布

番号	遺跡名	所在地	点数
1	後藤遺跡	北海道江別市	1
2	秋田城跡	秋田県秋田市	5
3	古城廻窯跡	秋田市	1
4	本館I窯跡	雄物川町	2
5	田久保下遺跡	横手市	3
6	竹原窯跡	平鹿町	2
7	富ヶ沢A窯跡	横手市	4
8	富ヶ沢B窯跡	横手市	35
9	仏田権跡	仙北町	1
10	相去遺跡	岩手県北上市	1
11	胆沢城跡	水沢市	2
12	紫波城跡	盛岡市	3
13	徳丹城跡	矢巾町	1
14	荒谷原遺跡	山形県天童市	1
15	生石2遺跡	酒田市	4
16	大浦B遺跡	米沢市	2
17	押切遺跡	天童市	1
18	上浅川遺跡	米沢市	1
19	北日長田遺跡	遊佐町	2
20	境田C遺跡	山形市	1
21	境田D遺跡	山形市	1
22	沢田遺跡	南陽市	1
23	関B遺跡	酒田市	1
24	道伝遺跡	川西町	2
25	沼田遺跡	八幡町	3
26	平野山窯跡	寒河江市	2
27	南原遺跡	高畠町	1
28	山楯5遺跡	平田町	1
29	赤井遺跡	宮城県矢本町	1
30	伊治城跡	築館町	6
31	市川橋遺跡	多賀城市	4
32	一里塚遺跡	大和町	1
33	亀岡遺跡	大衡村	1
34	山王遺跡	多賀城市	1
35	神社遺跡	仙台市	1
36	関ノ入遺跡	河南町	1
37	多賀城跡	多賀城市	7
38	中田南遺跡	仙台市	2
39	東山遺跡	宮崎町	2
40	東山遺跡	蔵王町	1
41	南小泉遺跡	仙台市	2
42	水入遺跡	多賀城市	3
43	宮沢遺跡	古川市	1
44	名生館遺跡	古川市	2
45	山口遺跡II	仙台市	1
46	大戸古窯跡群	福島県会津若松市	約200
47	上古田遺跡	会津若松市	1
48	笹目平遺跡	矢吹町	1
49	広網遺跡	郡山市	1
50	横沼西遺跡	会津若松市	1
51	能登遺跡	会津坂下町	1

表1 双耳環出土遺跡の一覧

これに反して東北地方では、双耳環のややまとまった数の遺跡数が知られ、北海道を含む東北以北の双耳環について、以下分布状況を中心に述べていく。

管見に及ぶ双耳環の出土遺跡数と数量は51遺跡327点(表1)で、その内訳は北海道1遺跡1点、秋田県8遺跡53点、岩手県4遺跡7点、山形県14遺跡24点、宮城県17遺跡37点、福島県6遺跡205点である。表の点数は、上に報告されている実測図を数えたもので、未見の報告や掲載の不可能な資料も考慮すれば、さらに数は増す。また、出土遺跡は判明しているが詳細不明の場合は1にしてあり、環の個体数の他耳が出土している場合は、耳2点につき環1個分の個体数として計算してある。従って、個体の異なる2つの耳を1個体としている場合もあり、点数は管見資料の最低個体数に近い数量を表していることになる。

各地の出土状況は以下のようである(第2図)。

北海道では、石狩低地帯の江別市後藤遺跡より1点見つかって^(註10)、他に出土例はない。ここでは、9世紀の北海道式古墳から出土している。東北地方では、青森県以外の5県から出土しており、秋田市と盛岡市を除く秋田・岩手の両県北地域、三陸海岸沿い、福島県浜通り地域では出土していない。山岳部とこれらの空白地域を除けば、およそ主要な平野部において確認できる。

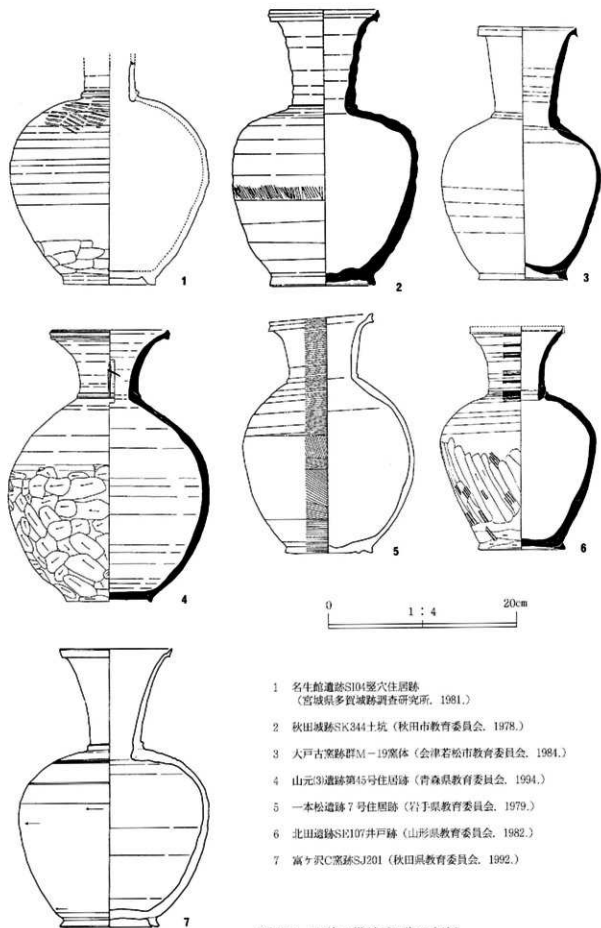
最も遺跡の集中している所は、多賀城市から仙台市にかけての地域で、8遺跡21個体が出土している。そして、5個体以上を目安にした小地域のまとまりを見ると、秋田県では秋田・横手市周辺地域(①・②)、山形県では酒田・山形・米沢市周辺地域(③・④・⑤)、宮城県では古川・仙台市周辺地域(⑥・⑦)、福島県では会津若松市周辺地域(⑧)、と8つの集中するブロック域が推測されてくる。さらに、これに追隨する地域として、岩手県盛岡市周辺地域(⑨)、北上から水沢市周辺にかけての地域(⑩)、宮城県河南町周辺地域(⑪)などが上げられる。これらの双耳環出土地域は、①と⑩に接する本州北端の空白地域と対峙した存在方を示し、律令国家支配の及ぶ範囲を明確に表している。

次に律令支配の観点から、①～⑪の双耳環出土地域をかい摘まんで説明する。

①では、秋田城跡及びそれと関連する窯跡から出土している。②では、窯跡とそれに直接関連する遺跡が中心で、北側でこれと近い弘田柵跡からも出土している。③では、城柵跡周辺遺跡の官衙関連遺跡から出土している。④では、窯跡と境田C遺跡など官衙関連遺跡から出土している。⑤でも、大浦B遺跡などの官衙と考えられる遺跡が目立つ。⑥では名生館遺跡・伊治城跡から出土しており、当地は城柵・官衙遺跡の多い地域でもある。⑦には、多賀城跡や郡山遺跡以外に周辺の官衙遺跡がある。⑧は、東北最大の窯業地で官衙とも関連する大戸古窯跡群から出土している。ここは、他の遺跡と比較して飛び抜けた出土量である。⑨では、紫波城や徳丹城の城柵跡から出土している。⑩では、肌沢城跡の城柵から出土している。⑪では、大規模な須江窯跡群の窯跡と官衙遺跡から出土し、近くに桃生城跡がある。このように、双耳環の出土している遺跡は、北海道の後藤遺跡を除けば城柵や官衙遺跡と強く関係していると言える。

3 環状凸帯付長頸瓶の分布

環状凸帯付長頸瓶は、体部と頸部の接合部分に断面が方形や半円状の凸帯が巡る長頸瓶で、奈良・平安時代に掛けて主に認められる(第3図)。この器種は、高台部の付くのが一般的であるが、東北以北の10世紀及びその前後のものには、無高台の例もある。長頸瓶の器形は2つに大別されるが、渡辺氏は肩衝壺型長頸瓶(長頸瓶A)と球制長頸瓶(長頸瓶B)に分類している^(註11)。長頸瓶Aは、肩部と胴部の接点が角張り口縁が折縁のない形態で、長頸瓶Bは同接点が球制を呈し口縁は折縁になる。A・Bの折衷的なものもある。



- 1 名生館遺跡SI04竪穴住居跡
(宮城県多賀城跡調査研究所, 1981.)
- 2 秋田城跡SK344土坑(秋田市教育委員会, 1978.)
- 3 大戸古窯跡群M-19窯体(会津若松市教育委員会, 1984.)
- 4 山元3遺跡第45号住居跡(青森県教育委員会, 1994.)
- 5 一本松遺跡7号住居跡(岩手県教育委員会, 1979.)
- 6 北田遺跡SE107井戸跡(山形県教育委員会, 1982.)
- 7 富ヶ沢C窯跡SJ201(秋田県教育委員会, 1992.)

第3図 環状凸帯付長頸瓶の類例

双耳環同様、環状凸帯付長頸瓶も全国的には出土例が少なく、東海地方を含む畿内やその周辺でも極めて稀である。平城京や関西の諸国でいくつか確認される他、美濃国での出土がやや目をひく。管見資料では、前者に比べて後者に長頸瓶Bが目立つ傾向にあるが、未知数の部分が多い。これらのうち、奈良時代以降で最も古いものは8世紀前半と考えられる。このように出土例の乏しい状況は、関東・北陸・中部の各地方においても同様である。^(2F12)

これに反して、東北地方ではまとまった数の遺跡数があり、北海道でもその数が増加している。特に東北地方での優越した在り方は、双耳環の場合と類似した在り方を示すもので、2つの器種の大きな共通点として注目しておきたい(ア)。以下、環状凸帯付長頸瓶の分布状況について述べていく。

管見に及ぶ環状凸帯付長頸瓶の出土遺跡数と数量は、200遺跡1,378点(表2・3)で、その内訳は北海道16遺跡21点、青森県37遺跡107点、秋田県29遺跡58点、岩手県30遺跡47点、山形県19遺跡44点、宮城県23遺跡52点、福島県46遺跡1,049点である。表の点数は、主に報告されている実測図を数えたもので、同一個体も別個体として数えた可能性もある。また、中には広口壺としたほうが相応しい器形もあり、頸部の高さが口径の長さ以上で、頸部付け根の窄まるものを長頸瓶の範疇とした。

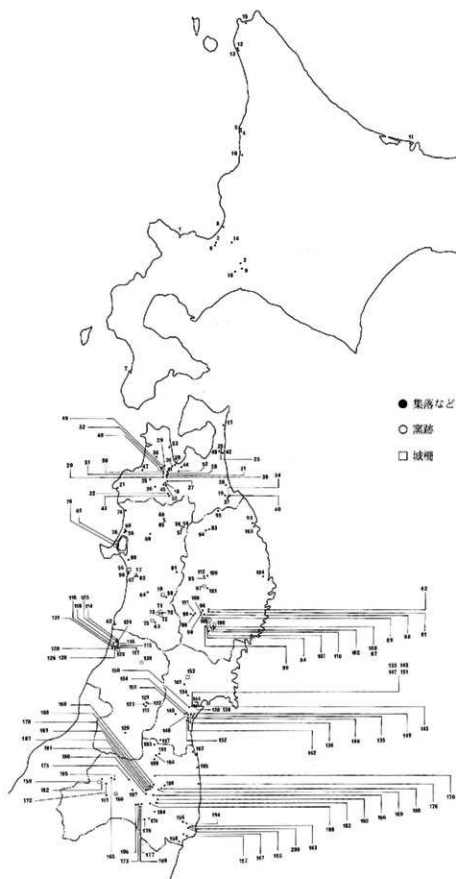
各地の出土状況は以下のようである(第4図)。

北海道では、道南の石狩低地帯にまとまりがある他、日本海側の沿岸に点在する特徴がある。また、オホーツク海沿岸のトコロチャシ南尾根遺跡も注意され、これらは10世紀以降のものが多い。東北では、山岳部を除く岩手県から宮城県にかけての海岸部が空白であるが、内陸の主要な平野部はほとんど埋め尽くされている。環状凸帯付長頸瓶は出土遺跡が多く、双耳環ほど明確に独立したブロックとしては捉え難い。

しかし傾向を知るために、特に10以上の遺跡が集中している地域をやや広域な範囲で大雑把に拾い出してみると、青森県の青森市・浪岡町周辺地域、岩手県の北上・水沢市周辺地域、山形県の酒田市周辺地域、宮城県の多賀城市・仙台市周辺地域、福島県の郡山・須賀川市周辺地域が該当しよう。さらに、1遺跡で10個体以上の出土量がある遺跡は、青森県砂田窯跡、秋田県秋田城跡、岩手県胆沢城跡、山形県山海窯跡群、福島県大戸古窯跡群・上吉田遺跡が該当する。後者のうち、先の遺跡集中地域にすでに含まれている遺跡を除くと、秋田市周辺地域や会津若松市周辺地域も環状凸帯付長頸瓶が多く出土している地域と見做され、特に大戸古窯跡群で卓越していることが注目される。

青森県の例を除くこれらの地域は、①～④の双耳環分布地域と比較すれば、郡山・須賀川市周辺地域を除いて一致している。また、環状凸帯付長頸瓶の便宜的な基準地域からは外れている双耳環出土地(②・④・⑨)においても、環状凸帯付長頸瓶の遺跡数や出土量は決して少なくないのである。従って環状凸帯付長頸瓶もまた、分布域の南側(B・C)で城柵や宮衙遺跡と強く関連していることが指摘でき、双耳環と共通する2つ目の特色として捉えることができる(イ)。

ところで、環状凸帯付長頸瓶は青森県でも多量に出土しており、北海道でも増加する傾向にある。これらは10・11世紀の時期が主体で、この時期のものは①・⑨より北へ分布領域が濃厚に拡大しており、これが双耳環との比較において分布上最も異なる点である(ウ)。なかでも青森市・浪岡町周辺地域のまとまりは、五所川原市の砂田窯跡・鞠ノ沢窯跡・持子沢窯跡を総称した五所川原窯跡群に近接しており、須恵器の需要と供給の関係が安定的に営まれたことの証左となろう。この窯跡群の製品は、青森県内はもちろん周辺地域の秋田・岩手両県の北域や北海道にまで及び、五所川原窯跡群を拠点とする須恵器の一大流通網が指摘されている。このように、双耳環の空白地帯から特に10世紀以降の環状凸帯付長頸瓶が多く出土し、8・9世紀を主体とする①・⑨以南のものより新しい段階に中心をもつことに注意する必要がある。



第4図 環状凸帯付長頸瓶出土遺跡の分布

番号	遺跡名	所在地	点数	番号	遺跡名	所在地	点数
1	大川遺跡	北海道余市町	3	51	山元3遺跡	青森県浪岡町	9
2	オサツ2遺跡	千歳市	1	52	横内2遺跡	青森市	1
3	K460遺跡	札幌市	1	53	蓬田大館遺跡	蓬田村	1
4	香川三線遺跡	苫前町	1	54	赤坂A遺跡	秋田県鹿角市	1
5	香川6遺跡	苫前町	1	55	秋田城跡	秋田市	13
6	ナクシュコトニ川遺跡	札幌市	1	56	案内Ⅲ遺跡	鹿角市	3
7	四十九里沢遺跡	上ノ国町	1	57	一本杉遺跡	鹿角市	1
8	聚富士上遺跡	厚田村	1	58	上の山Ⅱ遺跡	能代市	1
9	末広遺跡	千歳市	3	59	内村遺跡	千畑町	2
10	高砂遺跡	小平町	1	60	假釣遺跡	大館市	1
11	トココトシ南尾板遺跡	常呂町	1	61	海老沢窯跡	若美町	1
12	富里遺跡	豊富町	2	62	オフキ遺跡	象潟町	1
13	富徳遺跡	豊富町	1	63	柏原古墳群	羽後町	1
14	坊主山遺跡	江刺市	1	64	小出Ⅰ遺跡	南外村	1
15	幕別遺跡	稚内市	1	65	山王台遺跡	大館市	1
16	蘭越遺跡	千歳市	1	66	下夕野遺跡	秋田市	1
17	アイヌ野遺跡	青森県東通村	1	67	地蔵田A遺跡	秋田市	1
18	浅瀬石遺跡	黒石市	1	68	十二林遺跡	能代市	1
19	岩ノ沢平遺跡	八戸市	2	69	諏訪岱遺跡	森吉町	1
20	大沼遺跡	浪岡町	1	70	田久保下遺跡	横手市	2
21	大野平遺跡	岩崎村	1	71	富ヶ沢A窯跡	横手市	2
22	大平遺跡	大鷹町	2	72	富ヶ沢B窯跡	横手市	3
23	沖附Ⅰ遺跡	六ヶ所村	2	73	富ヶ沢C窯跡	横手市	2
24	小三内遺跡	青森市	1	74	土井遺跡	八森町	1
25	上尾岐②遺跡B・C	六ヶ所村	1	75	七津遺跡	羽後町	1
26	若美平遺跡	浪岡町	7	76	西海老沢遺跡	若美町	1
27	甲里見②遺跡	黒石市	1	77	野形遺跡	秋田市	1
28	三内遺跡	青森市	8	78	福田遺跡	能代市	1
29	真言館遺跡	五所川原市	1	79	弘田権跡	仙北町	9
30	神明町遺跡	金木町	2	80	待入Ⅲ遺跡	秋田市	1
31	杉の沢遺跡	浪岡町	2	81	武蔵野聖穴住居址群	田沢湖町	1
32	砂田窯跡	五所川原市	10	82	湯ノ沢F遺跡	秋田市	2
33	李平下安原遺跡	尾上町	4	83	飛鳥台地Ⅰ遺跡	岩手県浄法寺町	1
34	田前木遺跡	八戸市	2	84	胆沢城跡	水沢市	10
35	茶毘館遺跡	弘前市	1	85	一本松遺跡	矢巾町	1
36	烏海山遺跡	平賀町	2	86	岩崎台地遺跡群	北上市	1
37	殿見遺跡	八戸市	1	87	落合Ⅱ遺跡	江刺市	1
38	中野平遺跡	下田町	2	88	鬼柳西表遺跡	北上市	1
39	浪岡城跡	浪岡町	5	89	上大谷地遺跡	北上市	1
40	根城跡	八戸市	1	90	上鬼柳Ⅲ遺跡	北上市	2
41	羽黒平遺跡	浪岡町	1	91	上川岸Ⅱ遺跡	北上市	4
42	免茶沢遺跡	六ヶ所村	9	92	上川端遺跡	北上市	1
43	古館遺跡	碓ヶ岡村	5	93	源道遺跡	久慈市	2
44	笠沢遺跡	青森市	2	94	五塚Ⅰ遺跡	浄法寺町	1
45	前川遺跡	田舎館村	1	95	駒焼場遺跡	二戸市	1
46	鞠ノ沢窯跡	五所川原市	2	96	下谷地A窯跡	北上市	1
47	李沢遺跡	懸ヶ沢町	5	97	杉の上窯跡	紫波町	1
48	持子沢窯跡	五所川原市	1	98	煤塚遺跡	北上市	1
49	赤栄平④遺跡	六ヶ所村	3	99	膳性遺跡	水沢市	1
50	山本遺跡	浪岡町	6	100	外浦洗田窯跡	水沢市	3

表2 環状凸帯付長頸瓶出土遺跡の一覧(1)

番号	遺跡名	所在地	点数	番号	遺跡名	所在地	点数
101	田頭遺跡	岩手県茨波町	1	151	水入遺跡	宮城県多賀城市	2
102	力石・兎I遺跡	江刺市	1	152	名生館遺跡	古川市	1
103	中長内遺跡	久慈市	1	153	山口遺跡	仙台市	1
104	長根I遺跡	宮古市	1	154	六反田遺跡	仙台市	1
105	長根山窯跡	江刺市	1	155	久世原館	福島県いわき市	2
106	蕨谷地遺跡	北上市	1	156	石坂遺跡	いわき市	1
107	林前遺跡	水沢市	1	157	泉城跡	いわき市	1
108	松川遺跡	江刺市	1	158	上ノ内遺跡	いわき市	1
109	南仙北遺跡	盛岡市	1	159	大久保窯跡	新鶴村	1
110	宮地遺跡	江刺市	1	160	大戸古窯跡群	会津若松市	約950
111	八幡野II遺跡	北上市	2	161	大根畑遺跡	郡山市	3
112	湯沢西遺跡	盛岡市	1	162	大森C遺跡	相馬市	2
113	今塚遺跡	山形県山形市	1	163	小山遺跡	いわき市	1
114	浮橋遺跡	遊佐町	1	164	御山千軒遺跡	福島市	3
115	上ノ田遺跡	八幡町	1	165	上吉田遺跡	会津若松市	13
116	後田遺跡	八幡町	1	166	唐松A遺跡	郡山市	1
117	生石2遺跡	酒田市	2	167	岸遺跡	いわき市	12
118	北田遺跡	酒田市	3	168	北ノ内遺跡	郡山市	1
119	城輪遺跡	酒田市	1	169	光谷遺跡	三春町	1
120	熊野田遺跡	酒田市	5	170	郡山古遺跡	二本松市	2
121	境田C遺跡	山形市	2	171	巻巻遺跡	会津高田町	1
122	境田D遺跡	山形市	1	172	鶯沢道南遺跡	会津高田町	2
123	山海窯跡群	平田町	13	173	笹目平遺跡	大栄村	1
124	地正面遺跡	酒田市	1	174	左平林遺跡	東村	1
125	下長橋遺跡	遊佐町	2	175	三城湯家北遺跡	猪苗代町	1
126	高阿弥田遺跡	酒田市	1	176	鹿屋敷遺跡	浪江町	1
127	達磨寺遺跡	中山町	2	177	ジタイ坊遺跡	長沼町	1
128	手繰田6・7遺跡	酒田市	2	178	清水台遺跡	郡山市	1
129	道伝遺跡	川西町	2	179	関和久遺跡	泉崎村	1
130	福田窯跡	新庄市	1	180	背上A遺跡	三春町	1
131	南興野遺跡	酒田市	2	181	台畑遺跡	福島市	2
132	愛島東部丘陵遺跡群	宮城県名取市	2	182	田子畑遺跡	新鶴村	2
133	市川橋遺跡	多賀城市	6	183	田向F遺跡	郡山市	3
134	一里塚遺跡	大和町	1	184	兎喰遺跡	玉川村	1
135	今泉城跡	仙台市	6	185	長澤遺跡	原町市	1
136	郡山遺跡	仙台市	1	186	仲ノ縄E遺跡	船引町	3
137	子梁川東遺跡	七ヶ宿町	1	187	成田不動内遺跡	郡山市	1
138	山王千刈田遺跡	多賀城市	1	188	鳴神遺跡	郡山市	1
139	山王遺跡	多賀城市	5	189	新沢遺跡	大信村	1
140	下ノ内浦遺跡	仙台市	1	190	西前坂遺跡	郡山市	1
141	色麻古墳群	色麻町	1	191	東丸山遺跡	郡山市	5
142	清水遺跡	名取市	1	192	東山田遺跡	郡山市	1
143	高崎遺跡	多賀城市	3	193	前原遺跡	福島市	1
144	多賀城跡	多賀城市	9	194	向山遺跡	いわき市	1
145	燕沢遺跡	仙台市	1	195	原敷遺跡	会津若松市	13
146	中田畑中遺跡	仙台市	1	196	山崎遺跡	天栄村	1
147	新田遺跡	多賀城市	3	197	山ノ神遺跡	郡山市	1
148	二本松遺跡	川崎町	1	198	米山寺跡	須賀川市	1
149	藤田新田遺跡	仙台市	2	199	龜塚遺跡	福島市	1
150	栴江遺跡	仙台市	1	200	龍門寺遺跡	いわき市	2

表3 環状凸帯付長頸瓶出土遺跡の一覧(2)

4 2 器種の二律背反性

前項では、双耳環と環状凸帯付長頸瓶の東北から北海道にかけての分布状況を検討してみた。その結果、分布から見た大きな共通性（ア）と異質性（ウ）が導かれ、また、①・⑨以南においては、城柵や官衙との繋がりが理解された（イ）。特にイの特質は、律令国家の蝦夷政策と連動していることを表しており、律令国家支配が及ぶ境界域での特徴を示したのものである。また、両器種の東北以北における出現は、現在8世紀前半の資料はなく後半には安定的に出土するようである。このような状況下で、なぜアの共通性とウの異質性が生じてくるのであろう。以下、A～Cの城柵設置による区分と比較しながら見ていくことにしたい。

双耳環と環状凸帯付長頸瓶は総体ではA～Cで多く認められ、この地方を除いた東国や畿内では非常に少なく、中央において希少価値のある器であることは理解されよう。そして貴重品と認識されるものであっても、双耳環は耳のある環で環状凸帯付長頸瓶は凸帯の付く瓶と、器としての機能は簡単な装飾を排除すれば一般的な環や長頸瓶と変わらない。このことは逆に解釈すると、器の機能以外の役割も想定させるもので、関東以西では出土数量の少なからしても、生産量にまた生産地域に制限の加えられていた特殊な器と見ることができる。従って、これらは金属器などの模倣や呪術に関わるような、奢侈品もしくは儀器用品としての意味合いが強く、元来は限定された有力者や機関の所持品と考えられるのである。

それでは東北以北における2器種が、なぜ他の地方に卓越するのであろうか。双耳環の出土時期である、8・9世紀のA・Bに焦点を当てれば、それは律令国家の征夷と無関係ではあり得ず、城柵支配の責務を負う陸奥国・出羽国の関係として説明されるものと考えられる。熊谷公男氏は、Bへの一般公民による移民政策について述べている。そこでは、8世紀前半の組織的かつ強制的な方式から、神護景雲年間以降、優遇措置を講じて希望者を募る方式に変化したことを指摘した。また、延暦24年（805）の征夷の中止に関する「徳政相論」の前後に、東国などからの移民政策は停止し、蝦夷支配の政策転換が計られたとしている。

このように、8世紀以降陸奥・出羽両国の城柵支配の負担が益々大きくなっていく状況下で、特に双耳環や環状凸帯付長頸瓶の特殊な器種が、移民政策に関わることや朝貢・^(註14) 養給などを含んだ城柵支配に役立ったものと考えられないであろうか。また熊田亮介氏は、非蝦夷系住民と蝦夷との間で私的交易の盛んだったことを朝貢との関連で指摘しており、^(註15) 環状凸帯付長頸瓶が蝦夷社会に流布する一要因でもあり得た。これらのことは、特殊とみられる2器種が8世紀以降A・Bで多く出土することと矛盾しない。そして、この征夷に関わるものが畿内のみならず東国との関係においても、東北地方に出土量が多いことの、最も納得のいく理由ではなかろうか。そして、双耳環が多量に出土した富ヶ沢B窯跡やこれを大きく凌ぐ大戸古窯跡の出土状況、さらに膨大な量を誇る大戸古窯跡群の環状凸帯付長頸瓶のA・Bへの流通は、それを象徴しているように思われる。双耳環がCにおいて極めて希薄なのは、征夷推進側に意味のある器であったからである。

一方、環状凸帯付長頸瓶のCでの広がりはどうであろうか。このCでの在り方は顕著で、A・Bで環状凸帯のある長頸瓶が、その無い長頸瓶より極端に少ない在り方と矛盾した現象を示す。また、出土時期も10・11世紀が中心で、律令体制が解体する時期以降に当たっている。このことは、8・9世紀A・Bの延長線上にあるものの、それらとは寧ろ隔絶したもので、A・Bも含んだ王朝国家期の在り方を表徴していると推測される。そして、この時期の環状凸帯付長頸瓶は、すでに環状凸帯のもつ特殊性は失われ純粋に装飾のある瓶としてのみ機能したものであろう。8・9世紀の環状凸帯が、総体に「丁寧」でしっかりした作りなのに対し、10世紀以降稚拙な作りが多いのは、この辺の事情によるものと考えられる。

以上、双耳環と環状凸帯付長頸瓶について、分布を基にした広域的な視点で述べてきた。そのために、具体的な生産と消費の関係には触れないでしまった。しかし、律令国家期から上朝国家期にかけて、単なる2器種の生産と流通の問題に止まらない、内包する政治的背景をも予測することができた。この意味で、東北最大規模の大戸古窯跡群は、征夷の背後に控える陸奥国の須恵器生産地として重要な意味をもつと思われる。

最後に本論の作成に当たっては、研究会参加者を初めとして多くの方にお世話になったが、一人一人の御芳名を記さないことをお許し願いたい。ただし分布図の作成では、福島県について柳沼賢治氏に、北海道は鈴木信氏より多人な協力を載っている。また石田明夫氏には、大戸古窯跡群の双耳環と環状凸帯付長頸瓶の個体数を算出するご苦労をおかけしてしまった。以上のことがらについて深く感謝申し上げます。

註

- 1 例えば秋田県や岩手県の城柵設置地域では、須恵器産業生産の開始がそれら城柵設置時期と概ね重なるし、ロクロ十師器の導入もそれと関連することが指摘されている(仲田, 1994)。
 - 2 この地域区分は、熊谷公男氏が近畿郡を中心に採えた古代東北の3地域区分(熊谷, 1992)に基礎を置き、氏の近畿郡の北域に北海道を含めたものである。
 - 3 陶磁器の考古・理化学分析研究会(吉岡謙輔教授主筆)の討論で、大戸窯跡群の製品が多量産で出土していることが、石田明夫氏によって指摘されている(石田氏資料, 1995)。
 - 4 三浦圭介「<2>津軽地方で生産された須恵器」『新編弘前市史 資料編Ⅰ(考古編)』弘前市 1990
 - 5 池田裕英「9 平城京出土の須恵器について」『古代の上器研究—律令的土器様式の西・東2 須恵器—』古代の十器研究会 1993
木村泰彦・池田裕英「1 平城・長岡・平安各宮・京山出土の埴輪須恵器について」『古代の十器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器—』古代の上器研究会編 1994
 - 6 後藤建一氏には、瀬西窯跡群を初めとする東海地方の埴輪についてご教示戴いた。
 - 7 大江章「第四節 古代・中世の古窯跡」『各務原市史—考古・民俗編』各務原市 1983
年代観は渡辺博人氏のご教示によるし、また氏によって美濃須恵窯跡群等多くの情報を提供して戴いた。
 - 8 関東地方では、東京都南多摩窯跡群や茨城県流ノ台窯跡(酒井清治氏より教示)の遺跡の他、栃木県下野国分寺等や茨城県でいくつか出土している(大橋幸夫氏より教示)が数は少ない。北陸地方では今のところ福井県小曾原古窯跡群と、富山県の梅津野窯跡群や室津池V遺跡6号窯(前田祐司氏より教示)が知られている。中部地方では、長野県の芥子望土山窯跡群のみ(山田真一氏より教示)のようである。
 - 9 中野裕平氏は、上述研究会において宮城県内の集成資料を発表している(中野氏資料)。また、表1に掲載している遺跡の資料のうち、秋田城跡(2)、弘田柵跡(9)、上流川遺跡(18)、南小泉遺跡(41)、伊治城跡(30)、東山遺跡(40)からは、須恵器双耳環を模倣した土師器の双耳環が出土している。
 - 10 直井孝一・野中 宏「Ⅲ 後藤遺跡」『元江別遺跡群』北海道先史学協会 1981
 - 11 渡辺 一 第4章 成果と問題点『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山町教育委員会 1990
 - 12 宮見では、埼玉県鳩山窯跡群や新潟県笹神・賣木山窯跡の例を知るのみで、極めて少ない出土であることは確かである。頸に環状凸帯が付く様相としては、むしろ水瓶の器種に認められる傾向がある。
 - 13 熊谷公男 平安初期における征夷の終焉と東夷支配の変質『東北文化研究所紀要』第24号 東北学院大学東北文化研究所 1992
 - 14 今泉隆雄「蝦夷の朝貢と鑿船」『東北古代史の研究』吉川弘文館 1986
 - 15 熊田亮介「蝦夷と古代国家」『日本史研究』358号 吉川弘文館 1992
- (追記) 本論は、国立歴史民俗博物館吉岡謙輔教授主筆の「陶磁器の考古・理化学分析研究会」において与えて戴いた本稿で、1995年12月に脱稿したものである。本誌には、一部を手直ししてそのまま掲載してある。

秋田県出土の珠洲系陶器資料集成（下）

栗澤光男

4) 宗教的遺跡

秋田県で珠洲系陶器が出土している宗教的遺跡には、経塚、墳墓、寺院跡、神社跡などがある。なお、本項には、宗教関連と考えられる遺跡も含めた。

① 経塚・墳墓

経塚や墳墓は、一般的には見晴らしの良い丘陵上などに、小円墳状のマウンドを盛っているもので、それと分かるようだ。しかし、経塚と墳墓は外見で見分けがつかない。

秋田県内で確認されている経塚は、秋田県教育委員会発行の『秋田県遺跡地図（東北・中央・県南版）』によると、県北（鹿角市・鹿角郡2遺跡、大館市・北秋田郡なし、能代市・山本郡2遺跡）には4遺跡、県中央（男鹿市・南秋田郡5遺跡、秋田市・河辺郡2遺跡、本荘市・由利郡4遺跡）には11遺跡、県南（大曲市・仙北郡11遺跡、横手市・平鹿郡8遺跡、湯沢市・雄勝郡3遺跡）には22遺跡で、計37遺跡であり、その多くは、室町期頃の一字一石経を出土するものである。

また、これら経塚（経塚類似遺構も含む）の発見は偶然によるものが大半を占め、その様子は当時の発見者らの談話による知見が多いようである。したがって、経塚の様子が分かっているものは少ない。現状として大部分の経塚は未だ調査されておらず、近年活発に行われるようになった開発事業によって、封土（盛土のマウンド部分）を失ったもの、完全に消失してしまったものもあるようだ。

このうち珠洲系陶器出土の経塚は、二ツ井町御座堂遺跡（五輪台経塚）、能代市河戸川遺跡（経塚）、男鹿市加茂青砂経塚（向山経塚）、大森町観音寺経塚、横手市閑居長根1号経塚、雄物川町大沢森経塚・北野1号遺跡（経塚）、湯沢市松岡経塚の8遺跡である。また、墳墓は南外村小出I遺跡の1遺跡である。

【経塚】

御座堂遺跡〔五輪台経塚〕(20)

『秋田県の文化財』によれば、昭和9年に山本郡二ツ井町荷上場高岩山中腹の五輪台で、同町荷上場消防組の人たちによって発見された。塚の大きさは5m×3mほどの積み石塚のようで、その中から甕・壺・片口鉢・土師器などが7個出土したとわれている。しかし、現在残っているのは、甕2個、四耳壺1個、片口鉢1個の計4個である。なお、掲載資料の出土状態は、片口鉢（第34図507、図版6-26）で蓋された甕（第34図506、図版6-25）が埋置されていたようである。現在、秋田県指定有形文化財（考古資料）である。

河戸川遺跡〔経塚〕(40)

能代市河戸川集落の北側に鎮座する熊野神社の境内にある。『能代市史 資料編 考古』によると、「熊野神社本堂の下に宝物が埋まっているという伝承があることから、1965年（昭和40）本堂建替の時に、同社19代神主浅野喜代治が本堂下の石を取り除いたところ、口縁部の欠損した甕（第35図513、図版6-27・28）を発見した。」そうであり、「この甕には経石が内蔵されていたところから、経塚遺跡と判断された。」と記述されている。また、出土した珠洲系陶器の甕の埋納状態は第34図下図のようであり、甕を掘り上げる際に欠損した口縁部片を捜したが、検出できなかったようである。

加茂青砂経塚〔向山経塚〕(50)

日本海に突出する男鹿半島西辺の中央部付近にある。『男鹿市史』によると、「珠洲系の壺(第34図508、図版6-29)に納められたものが、昭和24年に出上している。壺の中には血書経を絹布に巻いて竹筒に納められ、壺には石の蓋が施してあった。」と記している。また、壺の年代は14世紀初頭のものとされている。

関居長根1号経塚(109)

『秋田県の考古学』によると、「明治22年、金沢町の加藤辰蔵氏が金沢町関居長根の頂上を掘ったところ、地下24cm余りに箕の形をした扁平な石を蓋とし、その下に径60cm余りの円い石枠を組み、陶製の壺を中心に周りに砂礫を詰めていた。その壺は肩部に刷毛目を波状に廻らし、四耳が付き、古鏡をもって蓋とし、耳から針金をもって絡げていた。」と記されている。出土した四耳壺(第34図511、図版7-31)の年代は、珠洲編年のⅡ期にあたり、13世紀前半～中頃のもと考えられる。また、古鏡は「蓋雁鏡」と呼ばれる青銅和鏡で、経筒とした四耳壺の蓋として転用されていた^(註1)。なお、明治41年に発見された関居長根2号経塚からは、元久3年(1206年)の紀年銘のある青銅製経筒が出土しており、同経塚の時期や1号経塚出土の珠洲系陶器の年代を知る有益な資料となっている。現在、関居長根1・2号経塚の出土資料は、秋田県指定有形文化財(考古資料)である。

観音寺経塚(107)

江戸時代の菅江貞澄翁が著した『雪の出羽路(平鹿郡三)』によると、佐々木治繼兵衛という人が、ある夜、夢に現れた翁から、観音寺の古寺山に4つの塚あり、そのうち3つの塚を掘れとのお告げを受けたので、塚を探しに川掛けたところ、文化6年(1809年)7月23日、観音寺山の中腹にある4つの塚を発見した。そこでお告げに従って3つの塚を掘ったところ、一つの塚には二振りの刀と久安5年(1149年)銘のある銅製経筒があり、一つの塚には二振りの刀と片口鉢を蓋とした経壘があり、その壘の中に記銘のない銅製経筒が入っていたということが記されている。今は、経壘(第36図514、図版7-33)しか残っておらず、他の出土物の所在は不明である。なお、この経壘は、現在、秋田県指定有形文化財(考古資料)になっている。

大沢森経塚(114)

『秋田県史 考古編』によれば、平鹿郡雄物川町大沢森から大正2年6月20日、佐藤梅治氏が発見した。現在、この出土品である珠洲系陶器の壺(第36図515、図版7-34)、白銅経筒の小破片若干、紙本経10巻余が横手市の正平寺に納められている。

北野1号遺跡〔経塚〕(116)

『雄物川町史』によれば、昭和34年の秋、雄物川町大沢字北野と今宿ハアカ坂の境界線確認の際に、たまたま発見された遺跡である。十覆頭のような盛土2つが100mほど離れてあり、それぞれ北野1号遺跡と同一2号遺跡と命名された。うち珠洲系陶器の壺(第37図516、図版7-35)が出土したのは、北野1号遺跡の封土からである。壺は経塚の基底部中央に掘られた穴に納められ、石の蓋が施されており(第37図下図)、中には何も入っていなかったようである。陶器の年代は珠洲編年のⅠ期で、12世紀中～後半に位置付けられる。ちなみに北野2号遺跡も1号と同様な構造で、中から岩隅が1点出土している。現在、北野1号出土の壺は、雄物川町有形文化財として雄物川町郷土資料館に保管されている。

松岡経塚(118)

昭和29年4月に発見された遺跡である。封土(第38図右下の図)の中からは、銅の経筒4、珠洲系陶器の壺3(第38図517、図版7-36、同図519・521)、片口鉢1(第38図520)、銅鏡1(第38図522)と刀子や洪武通宝の銭貨が出土した。経筒の1つには寿永3年(1184年)、もう1つには建久7年(1196年)の在銘が

ある。また、銅鏡は菊枝薄双鏡と呼ばれる鏡で、銅製経筒の底板として転用されていた。出土した珠洲系陶器は、銅製経筒の紀年銘などから、12世紀中頃～後半のものと思われる。

【墳墓】

小出1遺跡〔墳墓〕(99)

遺跡は、楢岡川右岸の標高30～70mの段丘上に立地している。昭和62・63年に発掘調査が行われ、旧石器時代から中世の複合遺跡であることが判明した。珠洲系陶器は幅40～80cm、深さ10～20cm、径5.2mの環状の溝状遺構から出土した。この遺構は封土が削平された中世墳墓と判断されている。出土した珠洲系陶器は、経筒(第34図509、図版6-30)の外容器、甕(第34図510)である。

なお、同遺構外の周辺からの甕(第50図659)との播鉢(第50図660)が出土した。

② 寺院跡・神社跡

寺院跡は大館市矢立廃寺跡と五城目町帝釈寺跡の2遺跡、神社跡は秋田市日吉神社跡の1遺跡である。また、宗教関連の遺跡としては、大館市長森遺跡、男鹿市蔵川1遺跡、大森町銅花山の鹿島神社の3遺跡が上げられる。

【寺院跡】

矢立廃寺(14)

矢立廃寺は、大館市白沢字松原小字ハゲノ下・上ハ台に所在する12世紀後半の寺院跡である。江戸時代後期の紀行文・隨筆に14世紀前半の寺院として記載され、地元では公家の隠通地と伝承されていた。しかし、昭和42年に第一次(測量)調査が行われ、仏殿・法堂・方丈からなる禅宗伽藍跡とされた。昭和48年の第二次(発掘)調査では総門・三門跡が検出された。さらに、大館市教育委員会が昭和59～61年まで発掘調査した結果、14世紀代の遺物は皆無で、12世紀から13世紀初頭のかかわりけ・舶載陶磁器・須恵器系中世陶器(珠洲系陶器)が出土し、12世紀後半の寺院跡と推定されている。この頃の大館地方は、「吾妻鏡」に藤原泰衡、比内(肥内)郡、贄柵、河田次郎の記述があるがあるように、奥州藤原氏との関係が知られており、それとの関連が目されている。

出土遺物は、舶来品である中国白磁四耳壺片と、12世紀に上限をもつかわりけ、12世紀後半から13世紀初頭にかけての須恵器系中世陶器(珠洲系陶器)の鉢・甕片である。また、かわりけは轆轤と手づくねで作られた皿、小皿、椀の3器種がある。

帝釈寺跡(60)

『秋田県遺跡地図(中央版)』によれば、本遺跡は「寺院跡」であり、「阿弥陀如来立像、珠洲陶片」が出土したと記されている。

【神社跡】

日吉神社跡(67)

『秋田県秋田市内遺跡詳細分布調査報告書』によると、掲載資料の珠洲系陶器壺(第39図523、図版8-37)は上新城中学校敷地内から出土したようであるが、詳細は不明である。

【宗教関連と考えられる遺跡】

長森遺跡(15)

掲載した壺(第40図526、図版9-41)・四耳壺(第40図527・528、図版9-42・43)は、『大館市の文化財』によると、「大森弘氏が所有地の耕地転換を行った際、沢中の水田中から偶然発見したもので、長森台地の南端に七ツ館を構えた館主によって水口祭のような農耕儀禮の際に使用(埋納)した壺」であろうと

考えられており、宗教的性格が看取される。

畷川1遺跡(52)

周辺には、南北時代(1331~1391年)に天台宗から真言宗に改宗したという長楽寺と五社堂などや、本山(標高715.1m)・真山(標高567m)を経て北浦の真山神社に通ずる修行道などがあり、宗教に関連すると考えられる中世の遺跡である。

磯村亨氏による「男鹿市畷川1遺跡出土の中世陶器一特に越前・珠洲系陶器について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号によれば、遺跡範囲内にある長楽寺西側の池を昭和32年に養魚場にする時と、昭和62・63年に長楽寺本堂裏の斜面が崩壊した際に、中世~現代にかけての陶磁器と共に珠洲系陶器が出土したとされている。その器種は甕、壺の2種である。なお、遺跡は長楽寺内にかかっており、出土した珠洲系陶器は、この寺に由来するものと思われる。

罇花山の鹿島神社(106)

掲載資料は、日野久氏によって『秋田考古学』第38号の誌上に紹介されている。それによると、大正15年6月14日、罇花山に鎮座する鹿島神社境内で発見されたようである。この場所は、元和6年頃に廃城となったと伝えられる大森城の出土輪とされている。出土器種は、壺(第39図524、図版8-38)と片口鉢(第39図525、図版8-39)の2種である。また、資料は壺の中に入っていた水晶の玉1個と共に、木製の箱(図版8-40)に納められている。

(5) その他の出土地

今回確認した、その他の珠洲系陶器出土地(遺跡)は58箇所である。このうち遺跡の分布・範囲確認調査と発掘調査によって資料が発見された出土地は33箇所であり、残り25箇所は耕作や工事等によって偶然資料が発見された出土地である。それらの出土地とその器種〔挿図番号:図版番号〕は、以下のとおりである。

- | | |
|----------------|--|
| 鹿角市歌内遺跡(1) | : 出土器種は、甕か壺である。 |
| 鹿角市一本杉遺跡(2) | : 出土器種は、甕、壺の2種である。 |
| 比内町大日堂前遺跡(7) | : 出土器種は、搦鉢〔531〕である。 |
| 大館市柏田遺跡(16) | : 出土器種は、搦鉢〔532〕である。 |
| 藤里町大屋敷(19) | : 出土器種は、搦鉢〔533〕である。 |
| 二ツ井町榎木(21) | : 出土器種は、甕か壺〔534〕である。 |
| 二ツ井町大倉遺跡(22) | : 出土器種は、甕か壺である。 |
| 二ツ井町切石(23) | : 出土器種は、四耳壺〔529:44〕、甕〔536〕の2種である。 |
| 二ツ井町切石小学校(24) | : 出土器種は、壺〔535〕である。 |
| 二ツ井町(採集地不明) | : 出土器種は、四耳壺〔530:45〕である。 |
| 八森町土井遺跡(28) | : 出土器種は、広口壺〔537〕、小壺〔538〕である。 |
| 峰浜村内林遺跡(29) | : 出土器種は、甕〔539・540〕、甕か壺〔541~545〕である。 |
| 能代市神田遺跡(32) | : 出土器種は、搦鉢である。 |
| 能代市田床内遺跡(35) | : 出土器種は、搦鉢〔547〕である。 |
| 能代市仁井田白山遺跡(36) | : 出土器種は、搦鉢〔546:49〕である。 |
| 能代市新山前遺跡(37) | : 出土器種は、搦鉢である。
※新山神社境内から出土したが、同社との関係は不明 |
| 能代市苗代沢遺跡(38) | : 出土器種は、甕か壺〔548・549〕である。 |

- 能代市腹鞍の沢遺跡 (39) : 出土器種は、甕か壺 [552~560] である。
- 能代市小友Ⅲ遺跡 (43) : 出土器種は、甕か壺 [550~551] である。
- 能代市上の山Ⅱ遺跡 (44) : 出土器種は、甕か壺 [561~526] である。※526はエヒバチ長根窯跡産
- 山本町外岡南 (45) : 出土器種は、甕か壺 [563~564] である。
- 八竜町扇田谷地遺跡 (47) : 出土器種は、甕、搦鉢の2種である。
- 若美町福田遺跡 (48) : 出土器種は、搦鉢である。
- 秋田市大沢遺跡 (61) : 出土器種は、甕 [624] である。
- 秋田市高田遺跡 (63) : 『秋田市遺跡詳細分布調査報告書』によると、「珠洲系陶器」出土と記されているが、器種は不明
- 秋田市待入Ⅲ遺跡 (64) : 出土器種は、甕か壺 [565~575]、小壺 [576~577]、搦鉢 [579~600]、鉢 [578] の4種である。
- 秋田市長面Ⅳ遺跡 (65) : 『秋田市遺跡詳細分布調査報告書』によると、「珠洲系陶器」出土と記されているが、器種は不明。
- 秋田市山ノ下Ⅱ遺跡 (68) : 『秋田市遺跡詳細分布調査報告書』によると、「珠洲系陶器」出土と記されているが、器種は不明。
- 秋田市秋田城跡 (71) : 出土器種は、甕 [602~613]、壺 [614・621・622]、片口鉢 [619]、搦鉢 [601・616~618]、鉢 [620] の5種である。
- 秋田市鶴ノ木 (72) : 出土器種は、壺 [624:46] である。
- 秋田市寺内 (73) : 出土器種は、壺 [623:47] である。
- 秋田市黒沢勝手神社 (76) : 出土器種は、甕 [626] である。
- 秋田市大杉沢遺跡 (78) : 出土器種は、壺 [627~635] である。※628~635は同一個体
- 秋田市古野遺跡 (81) : 出土器種は、壺 [636:48] である。
- 本荘市深沢 (84) : 出土器種は、甕 [637] である。
- 本荘市上谷地遺跡 (85) : 出土器種は、搦鉢 [638・639]、鉢 [640] の2種である。
- 本荘市土谷遺跡 (86) : 出土器種は、甕か壺である。
- 由利町鳴瀬台C地区 (88) : 出土器種は、甕か壺である。
- 仁賀保町馬場 (91) : 出土器種は、壺 [641:50] である。
- 象潟町カウヤ遺跡 (92) : 出土器種は、搦鉢 [642~644] である。
※珠洲編年の第Ⅵ期 (15世紀後半) に比定される。
- 矢島町 (94) : 出土器種は、甕 [645・646]、搦鉢 [647~649] の2種である。
- 矢島町土田家 (95) : 出土器種は、甕 [650~652] である。
- 南外村北田山田ヶ沢Ⅰ遺跡 (97) : 出土器種は、甕 [655]、搦鉢 [654] の2種である。※654は大畑窯跡産
- 南外村北田山田ヶ沢Ⅱ遺跡 (98) : 出土器種は、壺 [656:52] である。※大畑窯跡産
- 南外村小出Ⅰ遺跡 (99) : 出土器種は、壺 [660:51]、搦鉢 [661] の2種である。
- 南外村小出Ⅱ遺跡 (100) : 出土器種は、甕か壺である。※大畑窯跡産
- 南外村小出Ⅲ遺跡 (101) : 出土器種は、甕 [653・659]、壺 [658]、搦鉢 [657] の3種である。

※653は大畑松山窯跡産

- 仙北町一ツ森遺跡(104) : 出土器種は、壺〔662・53〕である。
- 横手市本田下遺跡(108) : 出土器種は、甕である。
- 横手市手取清水遺跡(111) : 出土器種は、甕〔663～667〕、壺〔668〕、播鉢〔670～689〕、瓶子〔669〕の4種である。
- 増田町平鹿遺跡(113) : 出土器種は、片口鉢〔703～705〕である。
- 羽後町院内沢遺跡(116) : 出土器種は、壺〔706・54〕である。
- 雄勝町桐木田遺跡(120) : 出土器種は、壺〔702〕、片口鉢〔690～701〕の2種である。
- ※691・693・694・702は大畑窯跡産と考えられる。

壺〔707・55〕は、出土地不明であり、秋田県立博物館に保管されている。

おわりに

昭和60年度に秋田県内で確認された珠洲系陶器の出土地(遺跡)は、窯跡21、館跡1、集落跡4、宗教的遺跡9、その他の出土地22の計58箇所であったが、今回の集成作業では、窯跡4、館跡15、集落跡4、宗教的遺跡13、その他の出土地58の計124箇所の出土地を上げることができた。この12年間で開発事業に伴う遺跡の発掘調査や遺跡の分布・範囲確認調査によって発見例が増えた結果であり、さらに遺跡の発掘調査などが増加すれば、珠洲系陶器の出土例も多くなることが見込まれる。

本稿が、珠洲系陶器(須志器系・世陶器)を出土する遺跡の年代や性格と、その流通などを探る上での基礎資料として、いささかでも役立てれば幸いである。

起稿にあたっては、発掘調査報告書・研究論文・会誌・市町村史など数多くの文献を引用させていただいたが、事実誤認があれば筆者の責任である。御批判いただければ幸いである。

なお、本稿(上)の(4)宗教的遺跡の^(註5)記述は、不備な点があったので編集係の承諾を得て、本号で改訂し本文を正式なものとさせていただいた。また、掲載した珠洲系陶器資料図の縮尺は、第37図516の珠洲系陶器資料を5分の1、以外の掲載資料を4分の1とした。

最後に、粗忽な筆者に本稿を執筆するきっかけを与えて下さった櫻田隆氏、珠洲系陶器の写真を快く提供して下さった日野久氏、色々と情報を提供してくれた藤井安正氏、花海義人氏、和泉昭一氏、磯村亨氏、伊藤攻氏、掲載写真作りを手伝ってくれた藤原堅晃氏、原稿に日を通して校正してくれた高橋学氏、そして筆者を支えてくれた同僚に記して感謝申し上げますと共に、今後も御助言、御協力をお願いする次第であります。

註1 庄内昭男「秋田県出土の古鏡集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 秋田県埋蔵文化財センター 1994(平成6)年

註2 註1と同じ

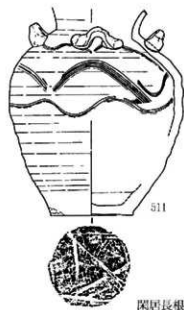
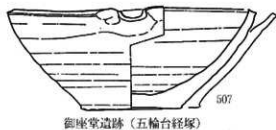
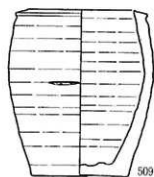
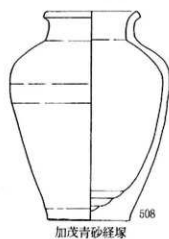
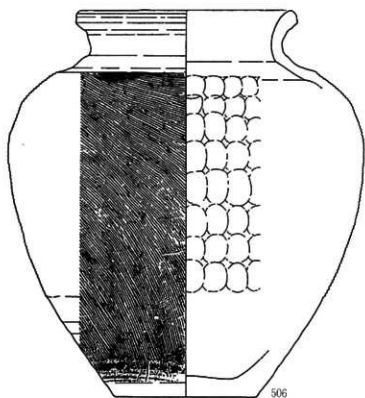
註3 栗澤光男「秋田県出土の珠洲系陶器資料集成(上)」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号 秋田県埋蔵文化財センター 1997(平成9年) p25～26

珠洲系陶器出土一覧（補遺）

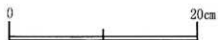
番号	出土地名	所在地	文献番号および備考
121	妻の神 I 遺跡	鹿角市花輪字妻の神	81
122	石鳥谷館跡	鹿角市八幡平字石鳥谷	82
123	洲崎遺跡	南秋田郡井川町浜井川字洲崎	秋田県教育委員会で調査
124	猿田遺跡	由利郡西目町出戸字猿田	83

引用・参考文献

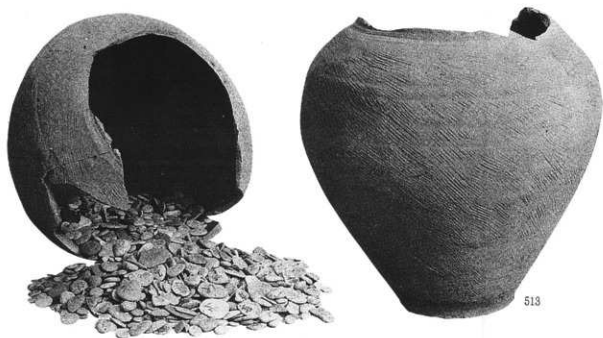
- 81 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ―妻の神 I 遺跡―』秋田県文化財調査報告書第107集 1984（昭和57）年
- 82 秋田県教育委員会『石鳥谷館跡―県道比内大葛鹿角線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査―』秋田県文化財調査報告書第279集 1998（平成10）年
- 83 西目町教育委員会『猿田遺跡―遺構確認調査報告書』 1994（平成6）年



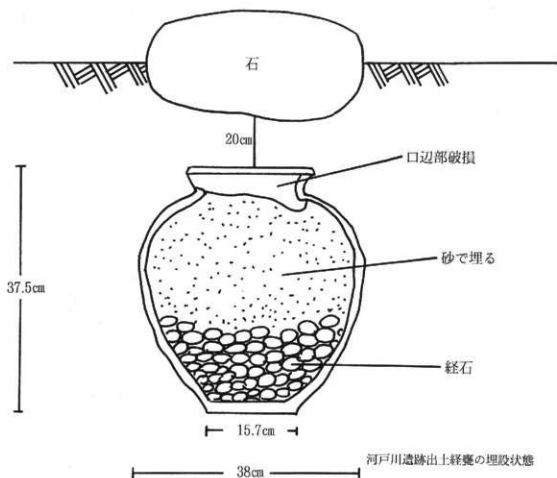
（509と510：墳墓）



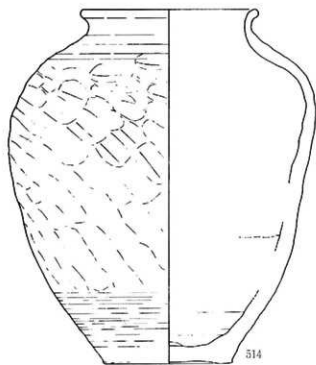
第34図 珠洲系陶器資料(33) 経塚出土(1)



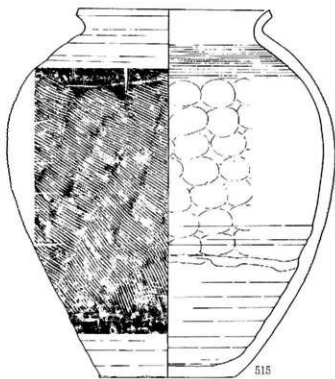
河戸川遺跡出土の経甕



第35図 珠洲系陶器資料(34) 経塚出土(2)



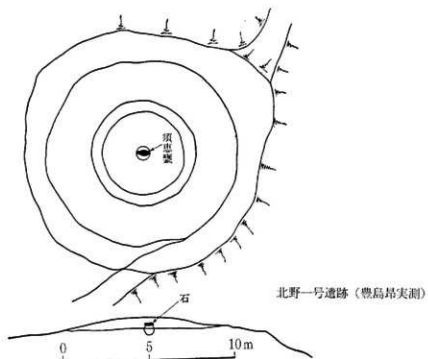
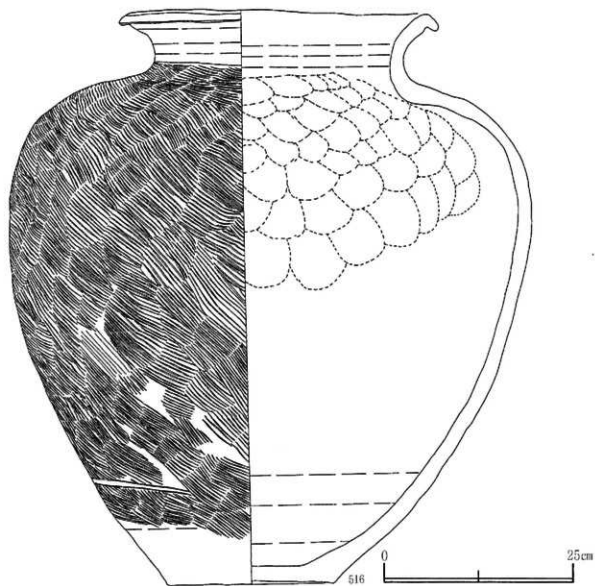
観音寺経塚



大沢森経塚

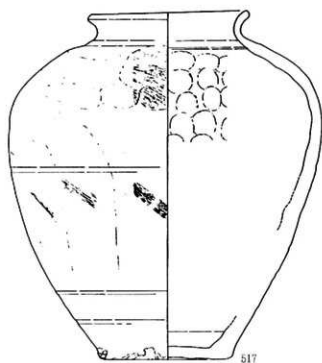


第36図 珠洲系陶器資料(35) 経塚出土(3)



北野一号遺跡 (豊島昂実測)

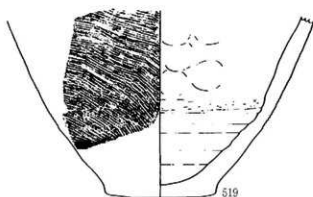
第37図 珠洲系陶器資料(36) 経塚出土(4)



517



518



519

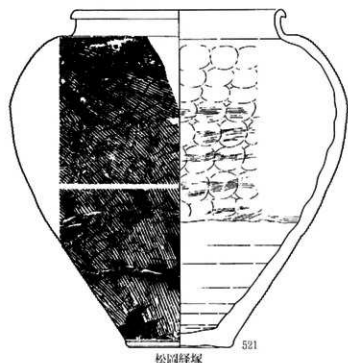


520



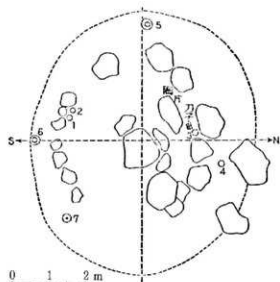
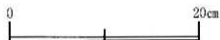
522

（菊枝薄双密鏡）

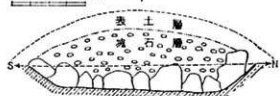


521

松岡経塚



0 1 2 m

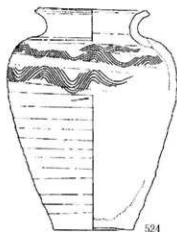


松岡経塚復元図（山下孫維氏図）

第38図 珠洲系陶器資料(37) 経塚出土(5)



秋田上新城日吉神社跡



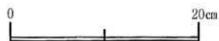
524



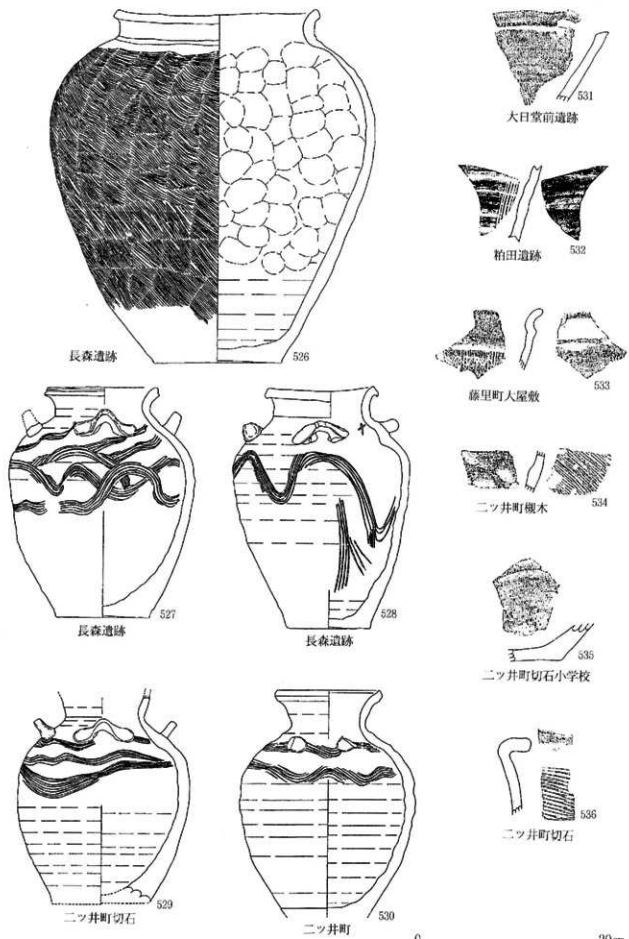
525



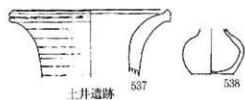
剱花山の鹿島神社



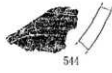
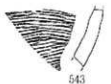
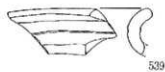
第39図 珠洲系陶器資料(38)



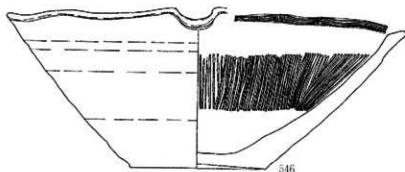
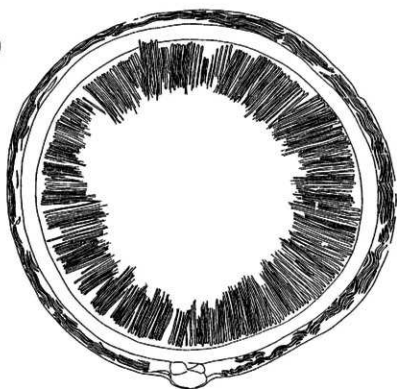
第40図 珠洲系陶器資料(39)



土井遺跡



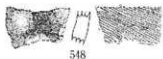
内林遺跡



仁井田白山遺跡



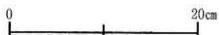
田床内遺跡



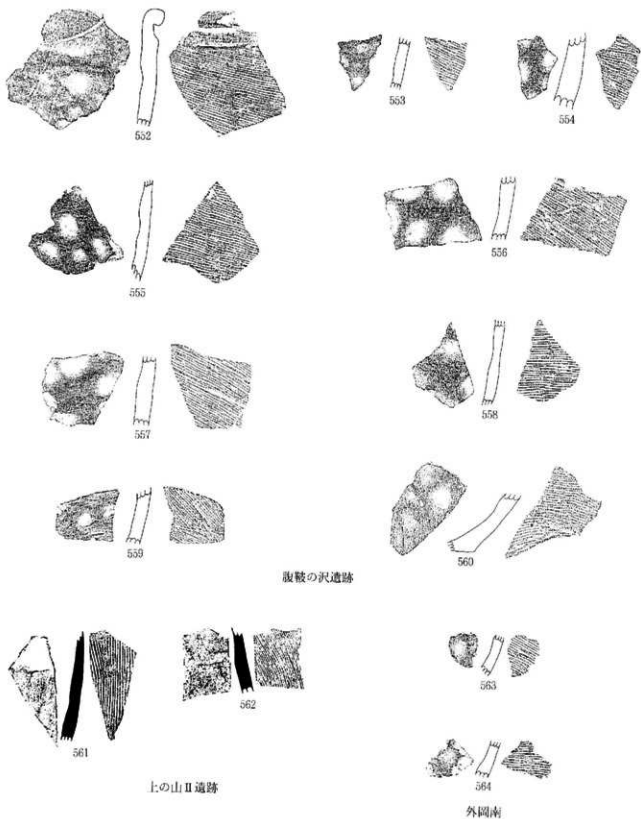
苗代沢遺跡



小友Ⅲ遺跡



第41図 珠洲系陶器資料(40)



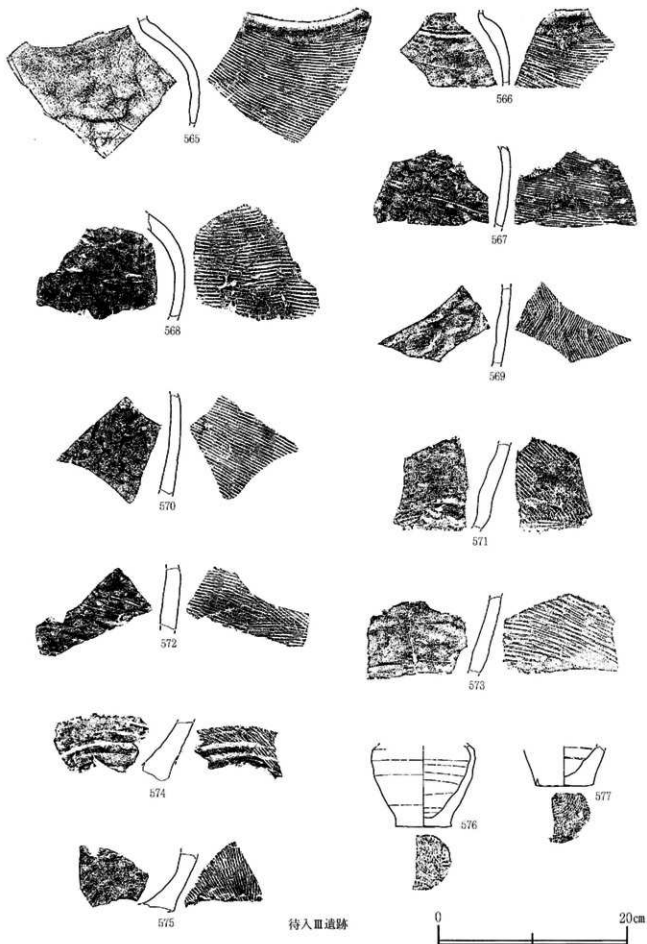
腹較の状遺跡

上の山Ⅱ遺跡

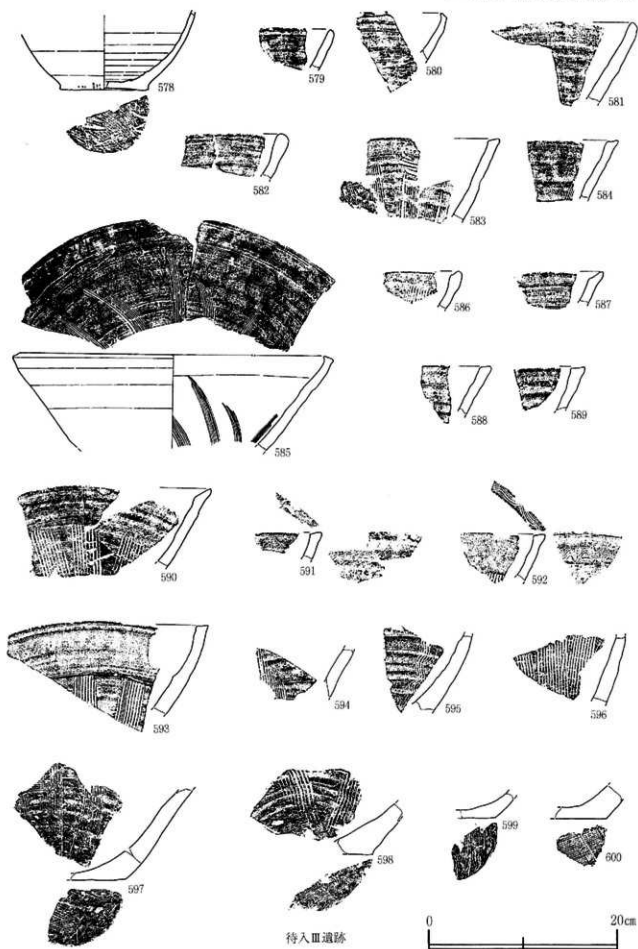
外園南



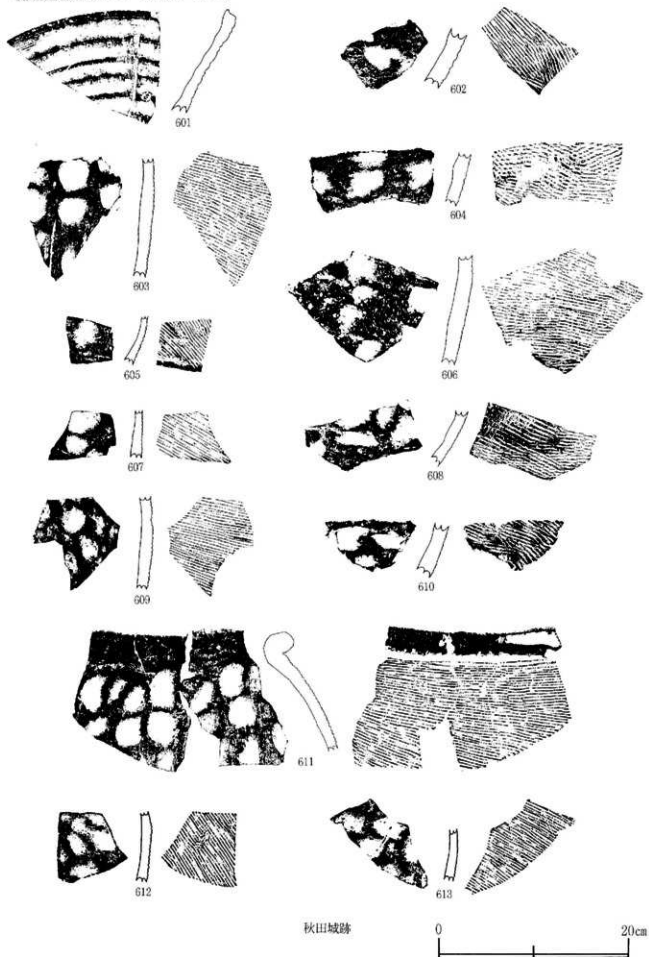
第42図 珠洲系陶器資料(41)



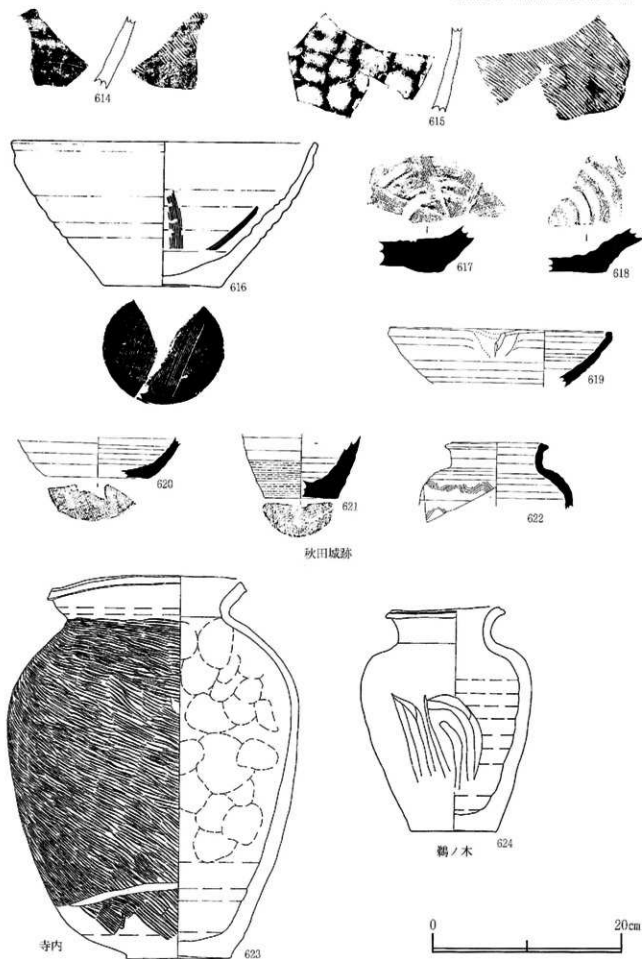
第43図 珠洲系陶器資料(42)



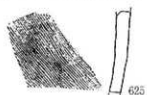
第44図 珠洲系陶器資料(43)



第45図 珠洲系陶器資料(44)



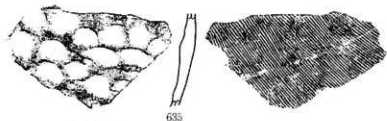
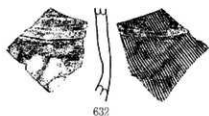
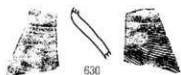
第46図 珠洲系陶器資料(45)



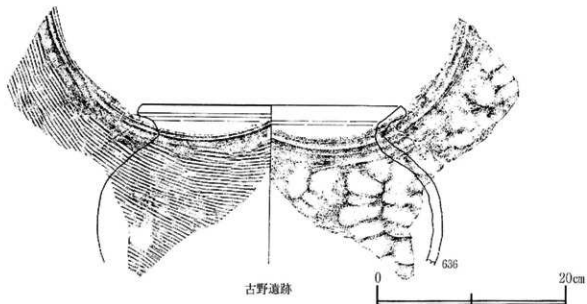
大沢遺跡



黒沢勝手神社

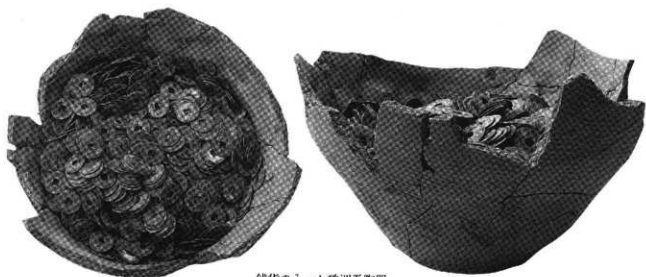


大杉沢遺跡



古野遺跡

第47図 珠洲系陶器資料(46)



銭貨の入った珠洲系陶器

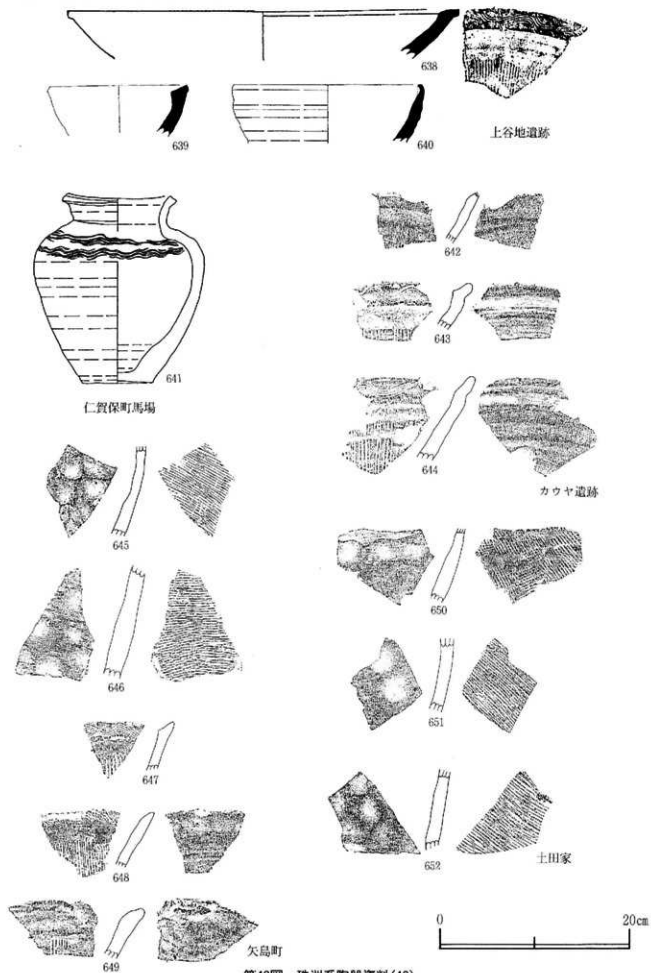


637

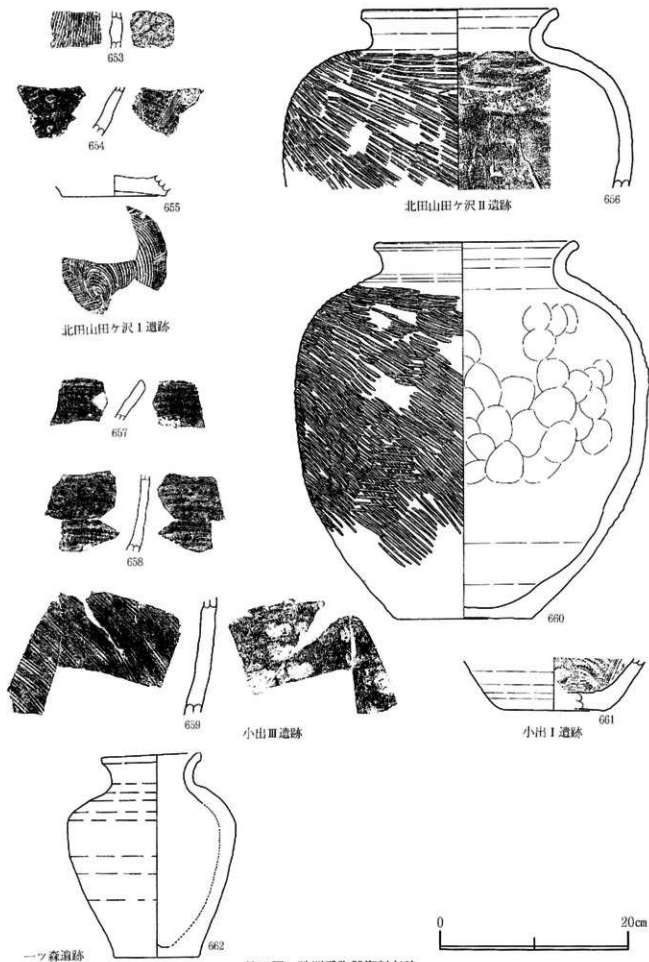
深沢遺跡



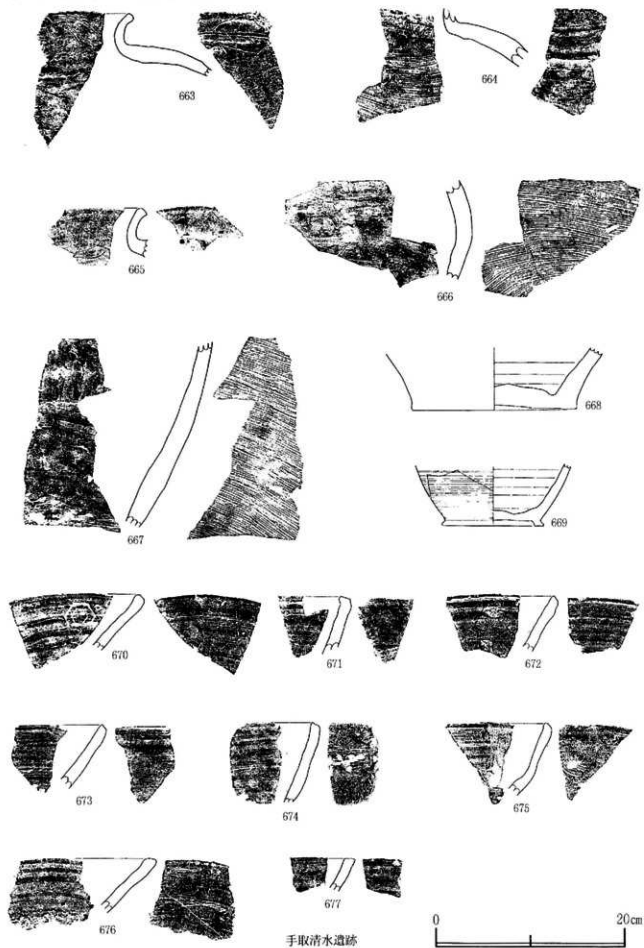
第48図 珠洲系陶器資料(47)



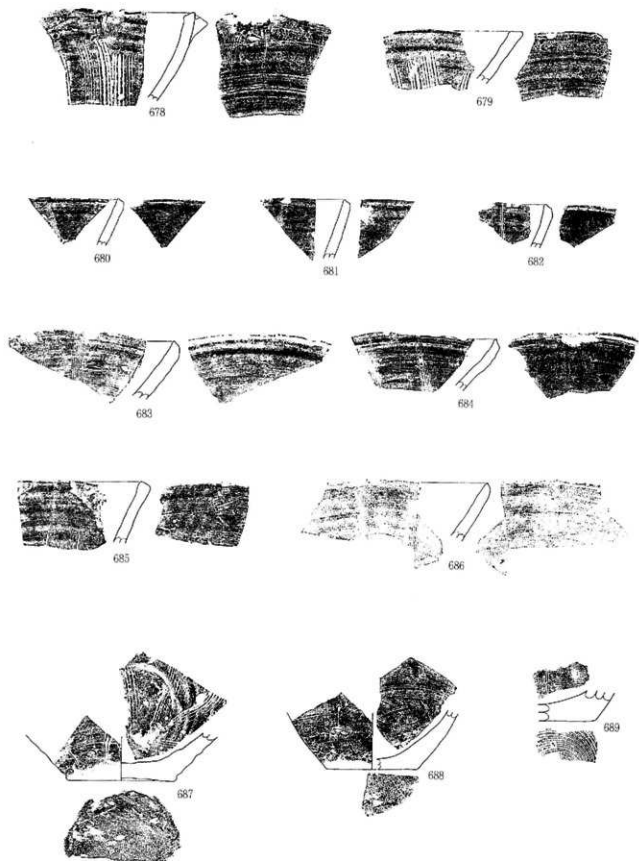
第49図 珠洲系陶器資料(48)



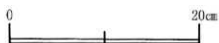
第50図 珠洲系陶器資料(49)



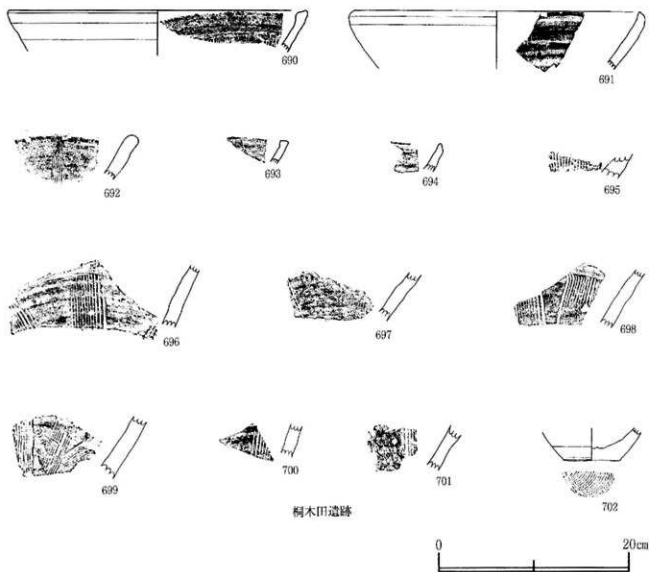
第51図 珠洲系陶器資料(50)



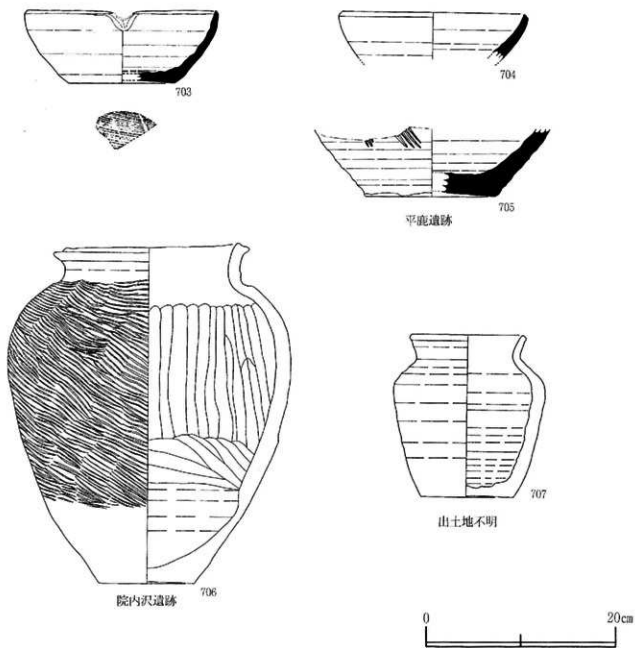
手取清水遺跡



第52図 珠洲系陶器資料(51)



第53図 珠洲系陶器資料(52)



第54図 珠洲系陶器資料(53)

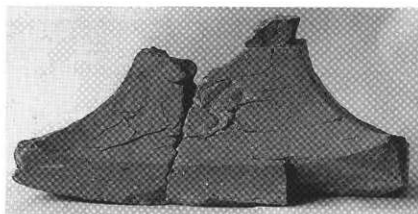
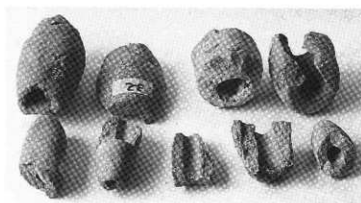
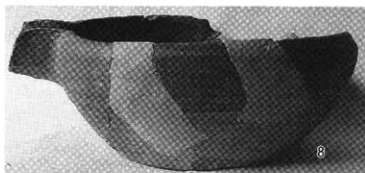
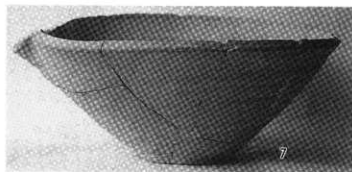
図版
1



エヒバチ長根窯跡



大畑山腰窯跡 (2~6)

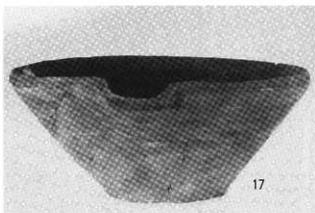


大畑檢山腰窯跡

図版
3



12
大畑松山腰窯跡



大畑窯跡



18

平泉館跡



19

広ヶ野館跡



20

長者館跡



21

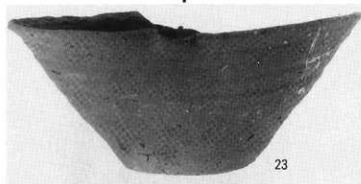
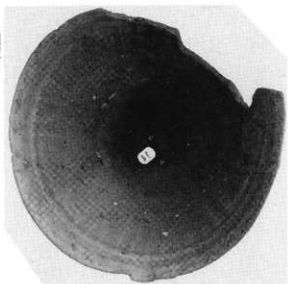
館前館跡



22

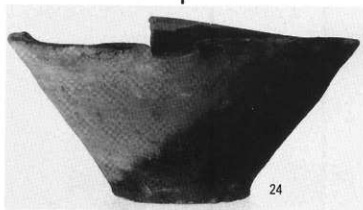
根井館跡

図版
5



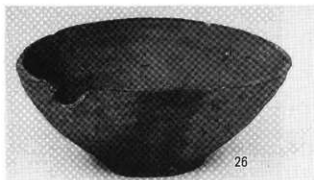
23

靱丁遺跡

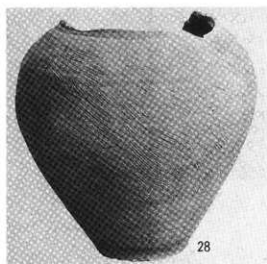
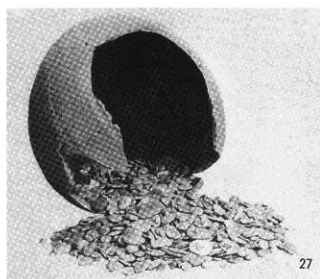


24

後城遺跡



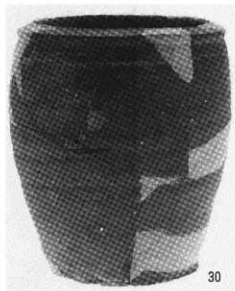
御座堂遺跡（五輪台経塚）



河戸川遺跡（河戸川経塚）



加茂青砂経塚



小出I遺跡



閑居長根 1号経塚



閑居長根 1号経塚



観音寺経塚



大沢経塚



北野遺跡

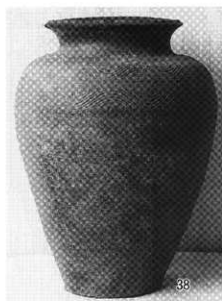


松岡経塚



秋田市上新城日吉神社跡

37

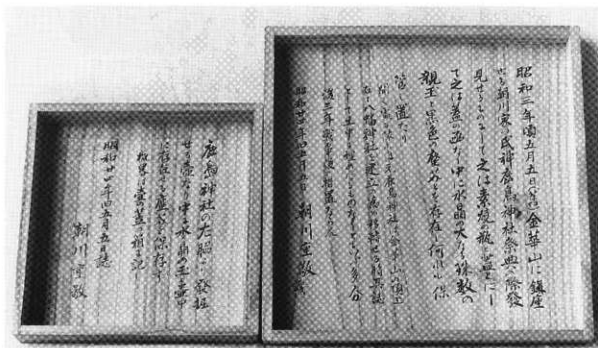


38



網花山の鹿島神社

39



網花山の鹿島神社（箱蓋の裏書き）

40



41

長森遺跡



42

長森遺跡



43

長森遺跡



44

二ツ井町切石



45

二ツ井町

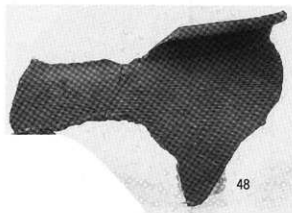


46

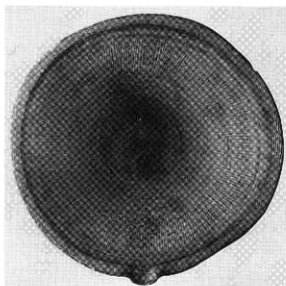
鞆ノ木



秋田市寺内



古野遺跡



仁井田白山遺跡



50

仁賀保町馬場



51

小出I遺跡



52

北田山田ケ沢II遺跡



53

一ツ森遺跡



54

院内沢遺跡



55

出土地不明

結髪形土偶

一男鹿市上鮎川Ⅰ遺跡で発見された遺物から一

磯村 亨

1 はじめに

ここに紹介する結髪形土偶は昭和26年当時、南秋田郡五里合村立五里合中学校（現男鹿市立五里合中学校）の生徒が採集したものである。発見場所は、『秋田県遺跡地図・中央版』^(註1)によると、男鹿市五里合字上鮎川地内に所在する上鮎川Ⅰ遺跡である。この遺跡からはもう一つの上偶が出土しており、これについては、奈良修介が昭和29年『叢』誌上に「遺物より見た男鹿半島の古文化」と題する論考のなかで紹介している。

上鮎川Ⅰ遺跡の北方には五里合盆地が開けており、その周辺の台地には縄文時代の遺跡が多数存在している。第1図は、これらのうち代表的な遺跡の位置を示したものである。なお、金沢大学の藤岡雄らは、五里合盆地の花粉分析を行ない、縄文時代中期から現代までの自然環境を復元している。^(註2)

2 紹介資料

頭髪部の一部、頭部左側、左腕、下半身を欠いた土偶である。残存する頭部から胴部までは17.9cm、胴回り13.2cm、重さは110.0gを測る。表面は、全体に丁寧な磨きを施し、顔・胸・背の一部には赤色顔料が残っている。左腕と胴部の欠損部にはアスファルトが付着している。頭頂部には結髪を表現するため粘土を貼り付けている。首の上には斜め上方を向いた逆三角形を呈する板状の顔をとりつけている。顔は、顔に粘土紐を貼り付けて刻みを施すことにより眉を表現している。鼻は山形の突起で眉と連続しており、鼻孔は断面が半円形の施文具による2個の刺突で表している。目は楕円形の凹みで表している。口は粘土瘤を貼り付けて中央部を楕円形に凹めて表現している。肩部は幅広く横に張り出している。手は肩部の先端部に垂れ下がっている。胴部文様は、両腕の付け根から喉元まで平行沈線を施し、沈線間には刻みを充填している。喉元から膺までは2本の沈線が垂れ下がる。膺は沈線を環状に巡らすことにより表現している。背には両腕の付け根から工字文が施される。工字文の下には6字状の沈線が垂下している。

結髪形土偶について佐藤嘉広は、頭部が結髪状の表現をなす、顔面が斜め上方を向くことが多い、肩部には特に装飾をもたない、胸部には肩から延びる隆帯により乳房としている、胴部には丁寧な磨きが施され、^(註3)地文等を持たない沈線による文様が描かれる等をその認定要件としてあげている。本土偶は、この認定要件をほぼ満たすものであり、結髪形土偶の範疇に含まれるものと考えられる。

3 おわりに

本土偶の用途・機能についての詳細は知る由もないが、器面に赤色顔料が塗られ、破損部をアスファルトで接着していることから、ある一定の期間何らかの用を果たしていたことが予想される。

秋田県内において縄文時代晩期後葉の土偶が出土した遺跡として、秋田市上新城中学校遺跡、地蔵田B(註5)遺跡、増田町平鹿遺跡、湯沢市鏡田遺跡等(註6)(註7)があげられる。同じ時期の土偶であるにもかかわらず、髪表現等細部に違いが認められる。これらが地域差から来るものなのかあるいは微妙な時期差を意味するものなのかどうかについては、同一地域からの類例の増加を待ちたい。

本稿を成すにあたり以下の方々からご教示、ご助言いただいた。記して謝意を表したい。

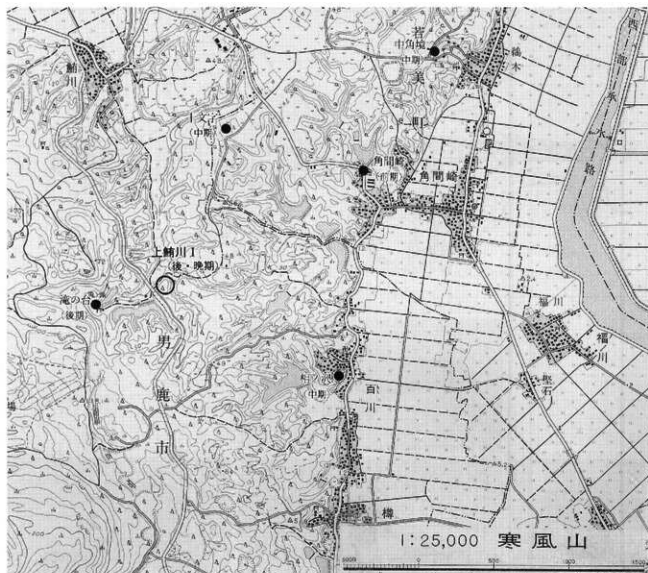
五十嵐一治、栗澤光男、高橋忠彦(五十音順、敬称略)

註

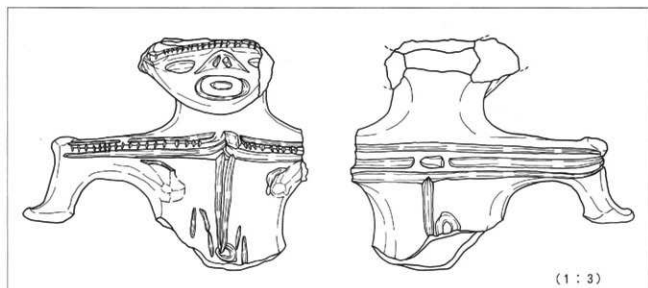
- 1 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(中央版)』1990(平成2)年
- 2 平成4年五里合盆地において藤則雄らが行った花粉分析により、遺跡の立地する丘陵地にクロマツ・アカマツ・コナラ等の二次林が縄文時代晩期頃に成立していたことが明らかになっている。二次林の成立がすなわち人間活動に起因するものであるとは断定できないが、少なくとも当時の丘陵に原植生を改変する外的要因が存在し、その結果二次林が成立していたのであるから、その外的要因は二次林がある程度の期間存在しうるほどに継続的なものであったと考えられる。このことから二次林成立が人間活動に起因すると考えることが適当であろう。
藤則雄・磯村朝次郎・高島麻衣子・邑本順亮「男鹿半島五里合における完新世の古環境解析」『金沢大学日本海城研究所第26号』1995(平成7)年
金沢大学教育学部地球科学教室藤研究室「秋田県八郎潟堆積物に基づく後水期の環境解析」『金沢大学教育学部地球科学教室藤研究室専報Ⅱ』1997(平成9)年
- 3 佐藤嘉広「亀ヶ岡文化終末期の土偶」『土偶シンポジウム5 宮城大会 東北・北海道の土偶Ⅱ—亀ヶ岡文化の土偶—シンポジウム発表要旨』1996(平成8)年
- 4 秋田市教育委員会『秋田市上新城中学校遺跡—学校改築に伴う緊急発掘調査概報—』1992(平成4)年
- 5 秋田市教育委員会『地蔵田B遺跡—秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書—』1986(昭和61)年
- 6 秋田県教育委員会『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第101集 1983(昭和58)年
- 7 秋田県教育委員会・湯沢市教育委員会『鏡田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第28集 1974(昭和49)年

参考文献

- 江坂輝弥校訂・小野美代子著『土偶の知識』東京美術 1984(昭和59)年
奈良修介『遺物から見た男鹿半島の古文化』『叢』vol.19 No.40叢社 1954(昭和29)年
秋田県教育委員会『石名館遺跡第2次発掘調査報告書—仙北平野農業水利事業上線川排水路工事に係る埋蔵文化財発掘調査—』秋田県文化財調査報告書第138集 1986(昭和61)年



第1図 上納川I遺跡とその周辺の主要縄文時代遺跡位置図



第2図 結髪形土偶

発行 1998（平成10）年3月

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第13号

発行 秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802
秋田県仙北郡仙北町弘田字牛嶋20番地
電話（0187）69-3331

印刷 株式会社三戸印刷所
〒010-0923
秋田県秋田市旭北錦町3番50号
電話（018）823-5351

